

国語国文学科で学ぶために

2020 年度版



KO

KU

TA

ME



早稲田大学教育学部

国語国文学科

国語国文学科で学ぶために 2020 年度版 目次

■ 国語国文・研究の基礎	1
1 電子資料とネットワークの活用	1
2 レポートと報告	4
■ 基本文献 総記	11
1 日本語学・日本語教育基本文献	15
2 上代文学基本文献	18
3 中古文学基本文献	21
4 中世文学基本文献	24
5 近世文学基本文献	27
6 近現代文学基本文献	30
7 中国文学（漢文学）基本文献	32
8 国語教育基本文献	34

コラム

一度は行ってみたい！近くの図書館	5
まずは、早稲田大学内の図書館を覗いてみよう！	5
一度は行ってみたい！近くの図書館・博物館	23
一度は行ってみたい！近くの美術館・博物館・図書館	31

巻末

教育学部国語国文学科スタッフ

この本を手にするみなさんに

■ 国語国文・研究の基礎

1 電子資料とネットワークの活用

電子資料をうまく、効果的に用いることで、情報を集める場合の無駄をはぶくことができます。集めた情報を整理・活用する場合にも役に立つので、報告やレポート作成・提出に役立てましょう。

1-1 文献検索

国語国文の研究は、関連してくる領域も多様で、言語・歴史・政治・教育・政治等の様々な領域の文献やデータを活用する可能性があります。

基本的な学術情報の検索

早稲田大学の図書館にかぎらず、多くの図書館では文献の調べ方、情報の集め方を積極的に発信しており、最近ではそのためのホームページも数多く提供されているので参考にするとよいでしょう。

＊早稲田大学図書館ホームページ→「資料の検索」→「学術情報検索」→「リサーチNAVI」を参照
まず1-1では、早稲田大学図書館の提供する「学術情報の探し方」を補うよう情報を記しておきます。

図書の検索の補足説明

検索の範囲

早稲田大学の蔵書量は多いですが、所蔵していない本も当然数多くあります。関心のある領域の書籍情報を集める場合は、早稲田大学図書館の蔵書検索（WINE）のみに頼らずに、国立国会図書館の蔵書検索や総合目録データベース（CiNii Books）での検索を併用して調べる習慣をつけましょう。

所蔵

必要な図書が借り出されていることもあります。そうした場合は、以下のデータベースが役に立ちます。

国立国会図書館オンライン(国立国会図書館の所蔵資料及び国立国会図書館で利用可能なデジタルコンテンツを検索)<https://ndlonline.ndl.go.jp/>

東京都立図書館<http://www.library.metro.tokyo.jp/>

(都立図書館の蔵書検索と都内の公立図書館等の蔵書、論文・雑誌記事の統合検索が可能)

公開されている本文データ

現在では古典、近代ともに画像やテキストで公開されている本文が多数あり、インターネット上で閲覧することができます。以下のサイトでは特に明治期や近世以前の希少な文献を現物に近い状態で見られるので是非とも活用したいものです。

ただし、次の点に注意しましょう。書籍にはタイトルが同じでも異なる時期に作られた複数の本があります（異本）。ですので、公開された本文テキストを利用するときには、そのもととなっている本（底本）がどの本なのか、そしてその情報が明示されているかどうか、を必ず調べましょう。明示されていなければ、印刷・刊行された本文等と照らし合わせて調べてみましょう。

国文学研究資料館 <http://www.nijl.ac.jp>

東京大学史料編纂所 <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

国際日本文化研究センター <http://www.nichibun.ac.jp/>

早稲田大学古典籍総合データベース <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>

日本語テキストイニシアチブ <http://etext.virginia.edu/japanese/>

近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/index.html>

青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp>

東京学芸大学E-TOPIA <https://library.u-gakugei.ac.jp/etopia/top.html>

論文検索の補足説明

論文のデータベース

国語国文研究の論文に関しては、図書館のホームページ「情報の探し方」で紹介されているサイト（CiNii、NDL-OPAC、MagazinePlus）を基本的には用いましょう。

また、上記の「国文学研究資料館」のデータベースでの論文検索も併用するとよいでしょう。これはキーワードがついているので、より細かく検索できます。これら複数のデータベースはカバーしている時代や領域が異なるため、複数のデータベースを用いることでより完全な情報が手に入ります。

紀要と学会誌

論文がのっている雑誌には、それぞれの学会が出している学会誌、大学などの研究機関が出している「紀要」や、一般の出版社が刊行する学術雑誌などの種類があります。論文のレベルや質は様々で、査読（掲載論文の審査）のある雑誌は一つの目安となりますが、あくまで目安にすぎません。論文の選択・選別には数多くの論文にあたり、批判的に読むことを続けるしかありません。

以下に国語・国文関係の代表的な学術雑誌をあげておきます。

【全般】

「国文学解釈と教材の研究」「国文学解釈と鑑賞」（以上二誌は現在休刊中）「文学」「文学語学」

「日本文学」「国文学研究」「早稲田大学国語教育研究」「国語と国文学」「国語国文」

【時代・領域別】

「上代文学」「萬葉」「古事記年報」

「中古文学」「むらさき」「和歌文学研究」

「中世文学」「説話文学研究」「軍記と語り物」

「近世文芸」「連歌俳諧研究」「江戸文学」

「日本近代文学」「昭和文学研究」

「日本中国学会報」「東方学」「和漢比較文学」

「日本語の研究」（旧称 国語学）「日本語学」「日本語文法」「日本語教育」

「国語科教育」「月刊国語教育研究」「教育科学国語教育」

報告書・文書類

研究に使う資料は、雑誌論文と研究図書だけではありません。これ以外にも官公庁の報告書や研究所の報告書類など、数多くの資料類が出ており、これらは図書館が所蔵していない、あるいはこれまで述べたデータベースにも含まれないこともあります。

こうした場合には、特定テーマに応じたデータベースや資料集がないかどうかを探してみましょう。

インターネット上の文書類

現在では官公庁の資料や民間企業の各種データをふくめ、インターネット上に公開されている有用な情報も数多く存在します。しかし、はたしてその情報はどこまで信頼できるでしょうか。

まずサイトの作成者や責任の所在が明確なサイトかどうかを確かめてください。情報を提供している作成者や企業の実名・所在・連絡先等がきちんと公開されていますか。インターネットから直接引用する場合には、そうした信頼性を見極めた上で、参照したサイトのアドレス、作成者、アクセスした日付を引用情報につけましょう。

「ウィキペディア」や『広辞苑』を鵜呑みにしない

報告の際の根拠資料として、インターネット上の情報、特にウィキペディアのようなサイトの情報をそのまま用いることはできません。なぜでしょうか。

「ウィキペディア」情報は、まず執筆者が定かではありません。また、たとえ執筆者が明示されていても、その執筆者が執筆内容やその誤りにきちんと責任を負えるような体制にはなっていません。さらに、書かれている内容についての根拠資料が必ずしも明示されていません。記載内容も流動的で一定しません。

具体例を考えてみて下さい。「私小説」という言葉を説明するには、「ウィキペディア」の説明を引いてくれればそれでよいのでしょうか。その情報は信頼できますか？そもそもその説明は、何をもとにして書かれたのでしょうか。その説明のもととなっている文献を読みましたか？

「私小説」という言葉を例にとれば、これまでに数多くの研究者や作家が、それぞれに定義したり、論じたりしています。どれが正しい説明というわけではありません。では、どうすればこの用語について自分なりの説明ができるようになるでしょう。

こうした場合、人文学において重要な手続きとなるのは「原典にあたる」ということです。例えば「私小説」であれば、まずその言葉が用いられた当時の文献にできるだけあたることです。それらの具体的な事例をもとに、自分なりの「私小説」という概念を作り上げてゆけばよいでしょう。

では、いつ頃、誰が、どういった文献で「私小説」を論じているのかは、どうやって調べればよいのでしょうか。原典にあたるにはその情報が必要です。その情報を集めるために、「私小説」に関する研究論文、文学事典、辞書、インターネット上の情報などを活用すればよいでしょう。つまり、「ウィキペディア」であれ、文学事典であれ、それは原典にあたる前の「手段」の一つにすぎません。実際の当時の文献にあたれば、事典類に書いていない様々な特徴や説明のばらつきに出会うでしょう。それら複数の文献を引用したり、比較参照したりしながら「私小説」を説明すればよいわけです。

「ウィキペディア」や『広辞苑』に出ている説明は、「誰か」がこれら複数の文献を切り捨てたり、編集したり、解釈したりしてできているのです。しかし、「誰か」ではなく、あなたがこの作業をはじめるとき、はじめて調査、あるいは研究という作業がはじまります。

1-2 情報の管理、統合

Ref Worksの活用

早稲田大学では、文献を記録、整理するためのツールとして、RefWorksというサービスを提供しています。これは、インターネット上に、自分用の文献リストを容易に作ってくれるソフトです。

- ・在学中にアカウント登録しておけば、卒業後も利用可能。
- ・インターネット環境がないと参照できない。
- ・フォーマットがやや固定的で、柔軟な運用には向かない

図書館のホームページに使い方の説明がありますので見てみましょう。

EXCELの利用

文献目録や、その情報をまとめた一覧メモなどを作成する際に、簡単でかつ汎用性もあるので、ここではEXCELを用いての文献情報等の活用に関して説明しておきます。

使い方は難しくありません。基本的には縦横並んだマスの中にデータを入力していきます。最初は少し面倒かもしれませんが、データの量が多くなればなるほど、なくてはならない道具となります。

ここではソフトの基本的な使用法は解説しません。それについてはオンライン・マニュアルや解説書を見ましょう。図書館にもガイドブックがありますし、インターネット上でもEXCELの簡単なガイドやマニュアルがたくさん公開されていますので、調べてみましょう。具体的には以下のような場合に活用されます。

- ・図書や文書の目録作成
- ・言語や文章のデータベースの作成
- ・統計やグラフの作成

2 レポートと報告

レポートや論文作成の授業として、以下の授業があります。

授業「学術的文章の作成」とライティング・センター」

早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムのオープン科目「学術的文章の作成」では、学術的文章を作る際の基礎が学べます（全8回で単位は1）。予約して個別に文章作成のアドバイスや指導を受けることも可能です。ぜひ利用してみてください。

演習では各自の調査・研究の報告が求められます。それをもとにしたレポートを作成することともなるでしょう。また、報告には報告のための配付資料を各自が作成します。これらレポートや参考資料を作成する場合には、いろいろな約束事があります。

2-1 してはならないこと

発表資料であれレポートであれ、盗用・剽窃（他人の文章を自分の文章のように示すこと）しないようにして下さい。①著作権上は盗用・剽窃は法律上の違反行為ですが、②教育上は盗用・剽窃はカンニングとなります。みなさんがインターネット上で何かを発表する場合には①に気をつけて下さい。大学では主に②が問題となります。他人の文章を借用する場合には、引用したことがわかるように「注」を付けましょう。

盗用や剽窃というのだいそれたことに聞こえますが、実際にやってしまいがちなのは、インターネット上で誰かが作成・公開しているページ・文章をコピー＆ペースト（コピペ）して、もともとの作成者を明示せずにレポートとして提出することです。他人の本や論文を丸写しして自分の文章として提出した場合も同じです。これを行うと試験においてカンニングを行ったと同様の扱いを受けますので絶対にやめましょう。

「参考文献」は微妙な問題をはらんでいます。過度の引き写しでなければ①では問題ないでしょうが、②においては問題があります。発表資料やレポートの最後に「参考文献」を挙げていれば、形式上は問題ありません。しかし、いくつかの「参考文献」をうまくつなぎ合わせだけのものがよく見られます。②の立場に立てば、これでは実質的には盗用や剽窃をほとんどかわりません。学んだことにならないからです。そこで、他人の文章を借用したり利用したりした時には、「参考文献」とせずに、「注」を付して引用の形式をとりましょう。（ただし、学問分野によっては、引用した文献を「参考文献」とすることがあります。）

そもそも、大学とは何のためにあるのでしょうか。大学とはみなさんが学問的な「説得の技術」を身につける場所です。そのプロセスで、わからなくて途方に暮れることやまちがえることは、決してむだではありません。

ません。あえて言えば、大学はすぐにわかる程度のことを学ぶ場所ではないのです。大学の教室はわからない体験やまちがえる体験をするためにあるのです。わからなからこそ自分の力で調べて考え、そしてまちがえます。そういうわからない体験やまちがえる体験を通して、みなさん独自の「説得の技術」に一步一步近づいてゆくのです。それが大学で学ぶことの意味です。盗用や剽窃によってこのような貴重な体験を失ってはなりません。

*参考 1-1 文献検索 インターネット上の文書類 (p.3)、2-3 レポートの形式 引用と脚注 (p.7)

一度は行ってみたい！ 近くの図書館

国会図書館……東京メトロ有楽町線「永田町駅」2番出口(A)徒歩約5分。他に、半蔵門線・南北線「永田町駅」3番出口(B)徒歩8分。千代田線「国会議事堂前」1番出口(C)徒歩12分。予め閲覧する資料の請求番号などを確認してから行く方がよい。古典籍資料の閲覧は、事前の申請が必要。土曜日は予約制。

国立公文書館内閣文庫……東京メトロ東西線「竹橋」駅下車徒歩5分。江戸城内にあった紅葉山文庫の蔵書を受け継ぐ。群書類従の底本となった写本類や、宋元明清の貴重な版本を所蔵。

まずは、早稲田大学内の図書館を覗いてみよう！

早稲田大学中央図書館 (18号館 2F) は、約280万冊もの蔵書数、最新の情報設備、多数の専門スタッフを誇る日本でも有数の図書館です。学生証を提示するだけで、一般図書・雑誌・新聞はもちろんのこと、研究書庫・マイクロ資料・AV資料・貴重書等も利用可能です。

また、キャンパスごとに設けられたキャンパス図書館として、**高田早苗記念研究図書館** (早稲田キャンパス 2号館 3F)、**戸山図書館** (戸山キャンパス 38号館 1F)、**理工学図書館** (大久保キャンパス 51号館 B1)、**所沢図書館** (所沢キャンパス 100号館 4F) があり、これらも自由に利用できます。その他、国文科の皆さんに便利な図書館としては、演劇関係の資料が豊富な**演劇博物館図書室** (5号館 1F・6号館 3F) や、日本語教育関係の図書・教科書類を揃えた**ICL日本語教育研究センター学生読書室** (22号館 3F) もあります。さらに、基本文献を探したり自習したりする時に便利な学生読書室も各学部設置されています。**教育学部学生読書室**は14号館 B1に、**大学院教育学研究科学生読書室**は14号館 8Fにあります。

早稲田大学の学生であれば、基本的に学内すべての施設が利用できます。この恵まれた環境を大いに生かして、積極的に学内の図書館を活用してください。なお、開館日・開館時間は時期によって異なりますので、詳細は図書館のホームページで確認してください。

【注意】図書館の蔵書検索 (WINE) で雑誌を検索した際に、配架場所が「日本文学専修室配架 戸山(日本文学)」と表示される場合があります。これは、戸山キャンパスの文学部日本文学専修室で管理している雑誌です。利用の詳細については、担当の教員に相談してください。

引用と著作権

書籍をはじめとして、画像や音楽、ホームページに至るまで、誰かが作成した表現は、別の誰かが著者にことわらずに複製して配布することは著作権法によって禁止されています。では皆さんが演習などで配付資料を作成・印刷する場合、誰かの絵や図・文章を複写して貼り付ける場合はどうなるのでしょうか。

著作権法にはいくつかの例外があります。例えば、授業の中で限られた人数に配布する場合は、特に著者に断らずに使用が可能です。また、「引用」もこの例外にあたります。ある文献の書誌情報ははっきりと示して、かつ、自分が書いた文章との違いを明示すれば、無断での使用が可能です。

一方、著作権自体がない場合もあります。小説の場合、著作者が亡くなって50年を経過すると消失しますし、より広い利用をうながすために、最初から著作権を放棄しているケースもあります。

いずれにせよ、複製や頒布が個人レベルでとても簡単になった今、著作権の制限も複雑さをましています。もしも自分の行おうとしていることが著作権法にふれるかどうか知りたい場合には以下のような問い合わせ可能な機関もあるので活用するとよいでしょう。

* 著作権情報センター <http://www.cric.or.jp/> 03-5353-6921

2-2 発表資料の作り方

発表資料（レジュメ）は発表原稿そのものではありません。自分の報告をわかりやすく伝え、根拠となる資料を適宜提示するためのものです。ですから、自分の話や資料が、いかにわかりやすく、伝わりやすいように示されているかがポイントになります。また、専門領域に応じて形式が異なる場合もありますので、あくまで目安ですが、以下の点に気を付けながら作成してください。

- ・自分の調査や報告に見合ったタイトルをつけること。
- ・最初に調査のねらいや、方法について簡潔にふれること。
- ・場合によっては、分かりやすくいくつかの節にわけて小見出しをつけること。
- ・引用と自分の論述の違いがはっきりとわかるように記述すること。
- ・孫引（ある文献に引用されている文章を、借用して引用してしまうこと）きは避けること。
- ・読むための原稿をそのまま資料にするのではなく、分かりやすい骨組みとして提示すること。
- ・引用文献には雑誌論文の場合、著者、タイトル、発表年月、号数、掲載雑誌を、書籍の場合は、著者、タイトル、刊年、出版社を記すこと。
- ・どこでどの文献を引用したか、参考としたかが分かるようにすること。
- ・根拠となる資料を適宜示すこと（資料が多い場合には資料編として最後にまとめてもよい）。

2-3 レポートの形式

レポートの顔

レポートには表紙をつけましょう。表紙には、授業名、レポートタイトル、担当教員名、そして自分の氏名、学籍番号をいれておけばよいでしょう。自分の書いたレポートに自分でタイトルをきちんとつけることです。課題として与えられたテーマや、授業名とは別に、自分の論じるテーマを明確に伝えてくれるタイトルをつけましょう。

事務所提出のレポートは、指定の表紙がサービスルームにおかれていますので利用してください（ダウンロードも可能 <http://www.waseda.jp/edu/report.html>）。むろん、それ以外のレポートでこの表紙を用いてもかまいません。本文は縦書きの場合もあるでしょうから、レポートの大きさ（A4 かB5 か）、書式については確認しておきましょう。（なお、表紙については、担当の先生の指示に従ってください。）

授業によっては、レポートをインターネットを介して提出する場合があります。早稲田大学の場合にはそのためのサイト、コースナビがあります。授業のお知らせや掲示でも使われる場合があるので、コースナビのサイトの説明や、入学時に配布された「PC・ネットワーク利用ガイド」などの説明をよく読んでみてください。このような提出の形をとる場合でも、上に述べたレポートの表紙情報は本文の冒頭にきちんと入れておきましょう。

レポートの構成

学術論文は、一般に「タイトル／要旨／キーワード／本文／表や図の一覧／参考文献」からなりますが、学問分野によっても多少違いがあります。大学でのレポートの場合はどうでしょうか。実際には分量にもよりますが、レポートの場合はもっと簡略になります。表紙をつけ、本文があり、最後に参考文献を付す、というのが基本的なかたちです。ただ、例えば 2000 字程度のレポートに、わざわざ目次や要旨をつける必要はありませんが、原稿用紙で 20 枚、30 枚といった分量になってくれば、目次や要旨をつけたほうがよいでしょう。学術論文のかたちは、ただ型にしたがえばよいのではなく、自分の論のねらいや内容を明確につたえるためにあることを忘れないでください。

見やすさ、読みやすさ

パソコン初心者には、紙がもったいないからと新聞のような小さな活字で、一枚の紙にびっしりと印刷する人がいます。手書きでも、印刷でも、ただ字があればいいというわけではありません。見やすいレイアウト、字の大きさを意識してください。頁の余白や改行幅を十分とり、読みやすい大きさの字でプリントアウトしてください。

パソコンで横書きの文章を作成するときでも、ルールは縦書き原稿用紙と同じです。段落の最初は一字下げましょう。イタリックや太字等、不要な文字の装飾に頼らずに、まずは言葉でしっかり表現することを心がけてください。

引用と脚注

学問は単独で成り立つものではありません。これまでの様々な人の考えや調査結果を批判したり、援用したりすることではじめて研究は可能になります。そこで重要なのが、引用や脚注です。

レポートを書くときには、自分が使った資料や参照した意見については、その出所を明示しなくてはなりません。誰が、どの本や論文に書いていたことなのか、それが自分の意見とどう違うのかをはっきり伝える必要があります。まとまった文章を引用するときには改行した上で 2 字分下げて引用し、終わったら再度改行します。短い文章であれば、「 」で引用すればよいでしょう。

引用する場合には、出典、つまりその引用もとの情報を明記します。例えば本の場合、著者、訳者、刊行年、出版社などの情報（これらを一括して書誌情報といいます）を記す必要があります。ところが、いちいちこれをレポートの途中、引用するたびに書き込んでいっては見づらいでしょう。それを避けるためにはいくつかの方法があります。

- ・引用したところに注 1、注 2 といった番号をふり、レポートの最後にそれら注 1 から一括して書誌情報を書く。
- ・引用したところに執筆者、及び文献の刊行年月のみ記し、最後に書誌情報を付した参考文献の一覧を書く。

こうした方法は、学問分野によって少しずつ違ってきます。自分の関心のある学問分野の専門書を少しのぞいてみましょう。こうした引用の例が必ずみつかるはずです。

参考・引用文献の示し方

- ・和図書 川瀬一馬『五山版の研究 上巻』（日本古書籍商組合、1970年3月）
 - ・和訳された図書 ヴォルフガング・シベルプシュ『図書館炎上』（福本義憲訳、法政大学出版局、1992年9月）
 - ・図書の特定の場所 橋本求『日本出版販売史』（講談社、1964年1月、656頁）
 - ・雑誌論文 東郷克美「泉鏡花・差別と禁忌の空間」（『日本文学』33巻1号、1984年1月）
 - ・論文とは別著者の図書に収められた論文
安藤正人「アーカイブズ学の地平」（国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学 上』（柏書房、2003年10月）所収）
 - ・新聞記事 「古典文学、洋の東西を超えて」（『朝日新聞』大阪版夕刊、2008年2月1日）
 - ・インターネットからの引用
早稲田大学教育学部「教育職員免許状」
(<http://www.waseda.jp/edu/examinee/4sikaku/menkyojou.html> 2008年2月10日)
- *漢数字を使うかどうか、元号か西暦か、など人によって違いはありますが、上記のような情報がしっかり入っており、表記に一貫性があれば問題ありません。

参考・縦書きの引用、注の示し方（近代文学編）

「らしくモラル」は大正期に定着した保守派の中心概念だった。

社会悪を見ぬきながら、知らぬ顔で、自分の役割をいかにも心からのそれであるかのように、まじめに勤める良心的インテリの自己偽瞞、世間頼み。「らしく」道德の矛盾を意識的に表現した典型的なアピールは、森鷗外随筆の小説『かのように』（明四四）に、よく表現されている。

この時期こそ、小・中学校の国民教育のなかで、商人は商人らしく、職工は職工らしく、まじめにふるまうことが要求されてき、そしてまた、喜んでそれに従うことに、飼犬の誇りをもつことができる中間層が形成される時期でもあった（1）。

「らしくモラル」は、自分に与えられた役割だけを真面目に勤めることで、日々の生活の安定を保とうとする良心的な都市中間層のモラルなのである。奥井復太郎は、人々は「『らしい』型」によつて「一介の型に嵌った人間としての自我を見出す」ことができるが、大都市ではそれさえも難しくなりつとあると、「らしくモラル」のあり方をめぐりに指摘している（2）。

こうした保守中間層の「らしくモラル」を内面化できれば、津田も言葉が発せられる文脈を彼の周囲の人々と共有し、「意味」を読む人になれたにちがいない。しかし、お延を「奥さんらしい奥さんに屹度育て上げて見せる」（百四十一）と言う吉川夫人の良心的でかつ傲慢な申し出も含めて、「らしくモラル」はしよせん欺瞞にすぎないのだ。それに、お秀の言葉でもわからうというものだろう。『明暗』では、「親切」はほとんど「欺瞞」の別名だということが。

注（1）「『らしく』モラルの形成」（南博・社会心理研究所『大正文化』勁草書房、一九八七・五）。

（2）奥井復太郎『現代大都市論』有斐閣、一九四〇・九。
（石原千秋「漱石と日本の近代 顔と貨幣―『明暗』③』『波』二〇一六・三）を改変。

参考・縦書きの引用、注の示し方（古典文学編）

一、はじめに

伝豊臣秀吉筆『源氏物語のおこり』の奥書は興味深い。

伝豊臣秀吉筆『源氏物語のおこり』奥書

天正十五六月十三日

ちやあまいるけいふく院（こゝまで伝秀吉筆、「右」以下筆が変わる）

右

此かき物はちやあに我身か心
さしの色はかりに筆にまかせ候
物がある人のぬすみて御うつし候
事にて候中／＼の事人々へも
つたへ候はんと御はつか

しくお

かしく

こそ候へ

慶福院

文禄貳年十月十六日

如此書候也（一）

奥書の筆者慶福院花屋玉栄は、その経歴に未詳の部分も多いが、『花屋抄』・『玉栄集』の著者として知られており、中世末から近世初頭の『源氏物語』研究を語る上で外せない女性である上に、頭・伝明名録（二）等には「近衛植家公息女」とあり、近衛家息女であったことが知られる。

豊臣秀吉は、言うまでもなく時の権力者。奥書に見える天正十五年（一五八七）の前々年の天正十三年（一五八五）に関白、十四年には太政大臣になっている。奥書に見える二つ目の年号・文禄二年（一五九三）は秀頼が生まれた年。文禄・慶長の役の最中であり、秀吉が絶対的な権力者として君臨していた時期である。

豊臣秀吉が、花屋玉栄書写の書物を書写したことにに関して、中田武司は「まさに忙中閑ありで、このような紙枚に墨を置く一時もあつたのであろう」（一）と述べ、三田村雅子は「慶福院玉栄の書であることに秀吉が特に拘っていたとは思われない」（三）と触れるのみである。

しかし花屋玉栄によつて二度目の奥書が記されることから、伝秀吉筆『源氏物語のおこり』が、その後、花屋玉栄の手元に送られていると知られる。秀吉は花屋玉栄弟の近衛前久の猶子となることで、関白、太政大臣へと成り上がった。当然秀吉は花屋玉栄が近衛植家息女であることを承知していたであろう。今一度、花屋玉栄と豊臣秀吉の関係を考えることで、当時の権力者の『源氏物語』享受の側面が浮かび上がってくるのではないだろうか。

また、近衛植家息女である花屋玉栄が書写して与え、時の権力者秀吉が盗んで写した書物を所有していたら、やあとは一体どのような女性なのだろうか。

注（一）中田武司解題『専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊 源氏のおこり』専修大学図書館蔵古典籍影印刊行会 一九八〇・一一

（二）香舟軒箕山著正宗敦夫編纂校訂『頭・伝明名録』日本古典全集刊行会 一九二八・一一

（三）三田村雅子『記憶の中の源氏物語』新潮社 二〇〇八・一一

（新美哲彦「花屋玉栄と「ちやあ」―伝秀吉筆『源氏物語のおこり』から―」（『平安文学の古注釈と受容』第二集 武蔵野書院 二〇〇九・九）より引用）

参考・横書きの引用、注、参考文献の示し方（日本語学編）

○談話と視点

文学において視点の問題が論じられるのは別の意味で、日本語の談話の文法においても、視点の位置について問題にされることがある。

談話の文法における視点については、まず、大江（1975）が、話し手がある出来事を見る際の位置について取り上げ、それを「視点の軸」と呼び、日本語の授受動詞や日本語と英語の移動動詞を例に、その特徴を分析したのが最初である。

その後、久野（1978）は、談話における視点を「カメラ・アングル」「共感度」という概念で定義し、以下のように説明している。

カメラ・アングルの一貫性 単一の文は、単一のカメラ・アングルしか持ち得ない。

（久野 1978 p. 131）

共感度 文中の名詞句 x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感（Empathy）と呼び、その度合、即ち共感度を E（x）で表わす。共感度は、値 0（客観描写）から値 1（完全な同一視化）迄の連続体である。（久野 1978 p. 134）

また、茂呂（1985）は認知科学の観点から「言語表現に視点を見つけるということは、言語表現から「見ること」に基本的な要素を取り出せること（p. 52）」であるとし、視点には、「視点人物：誰が見ているのか」「注視点：どこを見ているのか」「視座：どこから見ているのか」「見え：見たこと」の 4 つの要素が内包されていると述べる。

さらに、視点の概念を日本語の文法研究に生かすことを試みたのが松木（1992）である。そこでは、大江（1975）や久野（1978）で示された視点の見方は「心理的視点」であるにとらえ、視点は必ずしも心理的要因のみで決定されるわけではないことから、文法研究における視点 4 要素^{注1}の重要性を主張している。例えば、

鎌倉は横浜から近い。（松木 1992 p63）

を取り上げ、「鎌倉は」が主題化されていることから視点を鎌倉に置く見方と、「から」の持つ意味から見て「横浜→鎌倉」というベクトルが働き、横浜を視点とする見方の二通りがあると指摘する^{注2}。そこで、「視点人物：話し手」「注視点：鎌倉」「視座：横浜寄り」「見え：鎌倉は横浜に近いこと」ととらえることにより、上の例の視点の二面性は、「注視点：鎌倉」と「視座：横浜寄り」とに厳密に区別されることになる。久野（1978）の視点制約によると、二つの視点の矛盾によって非文になるとされるものだが、視点が一つの内容ではなく視座や注視点といった分割された下位概念を含むため、この文は非文にはならないとしている。

注 1 松木（1992）でいう視点 4 要素とは、「見る主体（＝視点人物）」「見られる客体（＝注視点）」「見る場所（＝視座）」「見る様子（＝見え）」である。

注 2 松木のこの分析は、仁田（1980）を参考にしている。

【参考文献】

大江三郎（1975）『日英語の比較研究－主観性をめぐって』南雲堂

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店

仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院

松木正恵（1992）「「見ること」と文法研究」『日本語学』9－8, pp. 57-70.

茂呂雄二（1985）「児童の作文と視点」『日本語学』4－12, pp. 51-60.

■ 基本文献 総記

古典文学は、上代・中古・中世・近世と大きく4つの時代区分がある。それぞれの時代ごとに、研究状況も注意すべき点も異なるので、詳細は時代ごとの基本文献に拠られたいが、古典文学の入門として、どの時代にも共通する文献についてここではまとめて紹介しておこう。

【テキスト・注釈書】

古典文学の主要テキストに校訂を施し、注釈を付したシリーズとして以下のものがある。これらは、一般読書人を対象として、編纂されているので、先ずははじめに読む本文として読みやすい。また、解題・解説もその作品に関する基本的な問題を分かりやすく述べていて参考になる。

- 『日本古典全書』108冊 1955～ 朝日新聞社
- 『日本古典文学大系』102冊 1968～ 岩波書店
- 『日本思想大系』67冊 1970～ 岩波書店
- 『日本古典文学全集』51冊 1976～ 小学館
- 『新潮日本古典集成』82冊 1989～ 新潮社
- 『新日本古典文学大系』101冊 1989～ 岩波書店
- 『新編日本古典文学全集』83冊 1994～ 小学館

【調べるために】

◎事典類

- 分からないことについて、辞書・事典類を繙くことが、アプローチの基本である。辞書や事典には、おのおの独自の編集方針があり、特色がある。凡例にあたって、その辞書の方針を知っておくことも大切なことである。また、辞書事典類は、解説のほかに「用例」が載っているものが多い。解説で満足することなく、その用例を手がかりに問題について考える癖を付けてほしい。

- 『日本国語大辞典 第二版』13冊 2000-2002 小学館
〔古語から現代語まで、現在もっとも大きな国語辞書→WEB「JapanKnowledge」から利用可能〕
- 『角川古語大辞典』5冊 1999 角川書店 書籍版のほかにCD-ROMもある。
- 『古語大辞典』1983 小学館
- 『時代別国語大辞典』(上代編1巻・室町時代編5巻) 1967-2000 三省堂
- 『大漢和辞典』13冊 1960 大修館書店 〔漢字・漢語について必見の書〕

- 辞書の用例の他に自身で用例を探し、その用例に基づいて問題を解決することも重要な手続きである。その場合、作品別の索引類が大変役に立つ。どの文献について、どんな索引が公開されているかについては、以下の総覧がある。下記『国語学研究事典』の「索引目録」もあわせて検索しておこう。

- 『国語国文学資料索引総覧 改訂版』1997 笠間書院

- 日本語学関係の術語・用語を調べるために。

- 『国語学大辞典』1980 東京堂 〔標準的な理解を示して定評がある〕
- 『国語学研究事典』1977 明治書院 〔参考文献を検索するのに便利。「索引目録」も有益〕
- 『日本文法事典』1981 有精堂
- 『言語学大辞典』1996 三省堂〔6巻が「術語篇」。ただし、やや特殊な解釈を含むので要注意〕

- 文学史上の諸事象や作品・人物を調べるために。各項目には、基本的な情報が記されていて、重要項目には参考文献も示されている。

- 『日本古典文学大辞典』6冊 1985 岩波書店 [1冊本(縮約版)も使い勝手が良い]
- 『日本古典文学大事典』1998 明治書院[全1冊。コンパクトながら最新の研究成果を踏まえる]
- 歴史的事項を調べるために。
- 『国史大辞典』15冊 1997 吉川弘文館 『日本史大事典』7冊 1994 平凡社
- 『日本文化総合年表』1990 岩波書店 『日本文学大年表』1986 桜楓社
- その他の特殊な分野の辞典・事典として代表的なもの。
- 『角川日本地名大辞典』49冊 1990 角川書店 [CD-ROM版もあり、検索に便利]
- 『日本歴史地名大系』50冊 1979-1996 平凡社[WEB「JapanKnowledge」から利用可能]
- 『故事・俗信 ことわざ大辞典』1981 小学館
- 『日本暦日総覧』1992 本の友社
- 『中国学芸大事典』1978 大修館
- 『日本漢文学大事典』1985 明治書院
- 『和歌大辞典』1986 明治書院
- 『和歌文学大辞典』書籍版・WEB版 古典ライブラリー WEB版は 日本文学Web図書館にあり
- 『俳文学大辞典』1995 角川書店
- 『増訂版 歌枕歌ことば辞典』1999 笠間書院
- 『歌ことば歌枕大辞典』1999 角川書店 日本文学Web図書館にあり
- 『日本歌謡辞典』1985 桜楓社
- 『仏教文学辞典』1980 東京堂
- 『仏教語大辞典』1975 東京書籍
- 『岩波仏教辞典』1989 岩波書店
- 『神道大辞典』1986 臨川書店
- 『日本古典籍書誌学辞典』1999 岩波書店
- 『くずし字用例辞典』1980 近藤出版社

◎文献目録

古典文学は活字の形で存在しているのではない。写本や版本として各図書館に散在しているのである。その作品がどのような形で伝承されてきたかも、一度は見ておきたい。その際、実際にその文献に当たる前に、どの図書館にどのような形で、どんな本があるのかなどについて、大まかな情報をつかんでおくことが重要である。下記の諸書がその手引きとなる。次のものは、現存する写本・版本の総目録。書名のよみ、巻冊数、編著者、成立時期、所在(所蔵図書館等)、活字本・複製本の有無を示したもの。

- 『増訂版国書総目録』9冊 1991 岩波書店
- 『古典籍総合目録』3冊 1990 岩波書店
- 古典を活字化した本・写真複製した本を調べるために。
- 『国文学複製翻刻書目総覧』正統 1989 日本古典文学会
- 『群書解題』1956～ 続群書類従完成会 『史籍解題辞典』1986 東京堂

◎研究史・研究動向

以下の2つは古典文学・近代文学の主要論文を、作者・作品・分野別に集成し、解説を加えたもの。関心のあるテーマに沿って2つのシリーズを年代順に追えば、研究史の流れをほぼつかむことができる。

『日本文学研究資料叢書』100冊 1969～ 有精堂

『日本文学研究資料新集』30冊 1989～ 有精堂

また、研究史と今後の展望について簡便にまとめたものとしては以下の雑誌がある。

『日本古典文学研究必携』（「別冊國文學」1979 秋季号）

講座を通読したり関係箇所にあたったりすることも、その作品や問題の位置づけを知る上で重要である。

『岩波講座日本語』13冊 1978 岩波書店

『日本語講座』6冊 新装版 1990 大修館

『講座日本文学』13冊 1971 三省堂

『講座日本文学の争点』6冊 1969 明治書院

『日本文学講座』12 1988 大修館

『岩波講座 日本文学史』18冊 1997 岩波書店

◎年鑑類

これまでに行われてきた研究、すなわち先行研究について、どういうものがどこにあるのかを知りたいときには、以下の年鑑等が便利。年度ごとの論文題目を通覧すれば、どのような分野でどのような研究がなされてきたか、その概要をつかむことができる。

『国語年鑑』 国立国語研究所編 大日本図書(以前は秀英出版)

『国文学年鑑』 国文学研究資料館編 至文堂(1977以降毎年刊行されたが現在は廃刊。下の国文学論文目録データベースにすべて含まれるので、そちらが便利。ただし最近の論文の収録は遅れ気味)

『日本語教育年鑑』 国立国語研究所編 くろしお出版

また、日本文学・日本語学関係(1964年以降)の論文が縮小印刷され、年度ごとに整理されて収められているものに以下がある。ただし、すべてが収められるわけではなく、また最近の論文の収録は遅れ気味。

『日本語学論説資料』(旧題『国語学論説資料』)

『国文学年次別論文集：上代：中古：中世：近世：近代：国文学一般』学術文献刊行会

なお、webからも文献情報は得られる。

『日本語研究・日本語教育文献データベース』 国立国語研究所

<http://www.ninjal.ac.jp/database/bunken/>

『国文学論文目録データベース』 国文学研究資料館

<http://base1.nijl.ac.jp/~ronbun/> [国文学研究資料館のデータベース。日本語学関係の情報も含まれる。]

◎教科書

教育学部の場合、過去の教科書に関する様々なデータや教科書自体の調査に関心をもつ学生も多い。教科書については、その掲載内容についてすでに多くのデータベースや参考図書が存在している。また教科書自体、復刻、集成されているものも多い。

『日本教科書大系 近代編』27冊 1978 講談社

『復刻国定高等小学読本』40冊 1991 大空社

『復刻国定修身教科書』32冊 1990 大空社

『明治以降教科書総合目録 小学校編』1967 小宮山書店

『明治以降教科書総合目録 中学校編』1985 小宮山書店

【本（写本・版本など）について】

書物そのものに関する知識をもつことも、大切である。

○本についての入門書

- 『書誌学序説』 山岸 徳平 1977 岩波書店
- 『和本入門』 橋口 侯之介 2011/9/10 平凡社ライブラリー平凡社
- 『江戸の本屋と本づくりー続 和本入門』 橋口 侯之介 2011 平凡社ライブラリー
- 『書誌学談義 江戸の板本』 中野 三敏 2015 岩波現代文庫
- 『海を渡ってきた漢籍: 江戸の書誌学入門』 高橋 智 2016 日外アソシエーツ
- 『古典籍研究ガイダンスー王朝文学をよむために』 国文学研究資料館 2012 笠間書院
- 『読書の歴史を問う: 書物と読者の近代』 和田 敦彦 2014 笠間書院

○本についての概説書・事典類

- 『書誌学入門』 川瀬一馬 2001 雄松堂
- 『日本古典籍書誌学辞典』 1999 岩波書店
- 『日本書誌学用語辞典』 1982 雄松堂
- 『図書学辞典』 1979 三省堂
- 『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』 堀川貴司 2010 勉誠出版
- 『日本古典書誌学総説』 藤井 隆 1991 和泉書院
- 『原典をめざして』 新装普及版 橋本 不美男 2008 笠間書院

1 日本語学・日本語教育基本文献

日本語学（国語学）が対象とする時代は、日本語を記録した言語資料が現れる上代から、我々が日々言語活動を行っている現代にわたる。また扱うべき言語要素も、音声音韻・文字表記・語彙・文法・文章（書き言葉）・談話（話し言葉）と幅広く、かつ、研究方法も通時的（歴史的）に見るか共時的（同時代的）に見るかで全く異なる。さらに、文体や表現の研究、方言・待遇表現（敬語）などの社会言語学的領域や言語行動・言語生活研究はもちろんのこと、意味論・語用論・認知言語学・対照言語学などとも深い関わりを持つ。一方日本語教育は、上記の日本語学諸領域に加えて、日本文化や教育学に対する知見も必要不可欠である。これらのすべてについて紹介するには膨大な紙数が必要となるため、ここでは日本語学全般に関する基本文献のほかは、現代語の文法・語彙等に焦点をしばって紹介することにする。

【テキスト】

日本語学研究では、上代文学から近現代文学までのすべてのテキストが対象となる。具体的には、各時代のテキスト欄を参照してほしい。近現代の語彙・語法を調査する場合には、次のCD-ROMが利用できる。

『新潮文庫の100冊／明治の文豪／大正の文豪／新潮文庫の絶版100冊』

また、著作権の切れた作品や著作権者が公開を許可した作品を電子化しテキストファイルにしてインターネット上に公開した『青空文庫』を利用して検索することもできる。また、国立国語研究所が開発・公開している各種のコーパスの利用も一般化している（http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/）。

なお、談話分析では、自分で録音した会話資料を分析対象とすることが多い。市販CD-ROMとしては、『合本 女性のことば・男性のことば・職場編』（現代日本語研究会編 2011 ひつじ書房）がある。

【調べるために】

○日本語全般について調べるために

『日本語百科大事典』1988 大修館書店

〔日本語という言語にかかわることがらを総合的に扱ったもの。日本語・日本語学のほとんどすべての分野にわたって平易に解説しており、個々のトピックについて調べるのに便利。〕

○辞典類…具体的な単語や、あるまとまった表現・文型の意味・用法について調べるために

『日本国語大辞典 第二版』全13冊 2000-2002 小学館

『基礎日本語辞典』森田良行 1989 角川書店

〔一般の辞書では触れられない基礎的な語の解説が詳しい。類義表現も数多く取り上げられており、日本語教育では欠かせない。〕

『教師と学習者のための日本語文型辞典』グループ・ジャマシイ 1998 くろしお出版

〔日本語教育向き。〕

『日本語表現・文型辞典』 1997 朝倉書店

○事典類…日本語学・言語学・日本語教育に関する事項や術語について調べるために

『国語学大辞典』 1980 東京堂 〔やや古くなっており、現在、改訂作業が進行中。〕

『日本語学研究事典』 2007 明治書院

『日本語学キーワード事典』 1997 朝倉書店

- 『日本語大事典』 2014 朝倉書店
- 『言語学大辞典』 1971-2001 三省堂
- 『日本語文法大辞典』 2001 明治書院
- 『日本語文法事典』 2014 大修館書店 [議論の比較に便利。上級者向け。]
- 『新版日本語教育事典』 2005 大修館書店 [最新のもので、日本語教育の全体を知るのに有益。]
- 『日本語教育ハンドブック』 1990 大修館書店 [やや古いが、上記の事典より実践的である。]

○入門書…基礎知識習得のために

- 『日本語学を学ぶ人のために』 玉村文郎編 1992 世界思想社
- [日本語学が扱う諸領域(文法・語彙・音声音韻・文字表記等)の概説の他、応用編として日本語教育概説・日本語教育各論がついていてわかりやすい。]
- 『新しい日本語研究を学ぶ人のために』 玉村文郎編 1998年 世界思想社
- [日本語を世界の諸言語の中に置いたとき、どのような特性が浮き彫りにされるのか。〈国際化〉と〈情報化〉の時代に対応する対照研究と新しい日本語論をわかりやすい形でまとめ、新時代に求められる日本語研究のあり方を提示。]
- 『日本語教育学を学ぶ人のために』 青木直子・尾崎明人・土岐哲編 2001 世界思想社
- [歴史的・社会的位置付けに始まり、応用言語学・心理学・教育学・異文化コミュニケーション論などの視点から日本語教師の仕事を再検討した、日本語教師志望者のための新しい日本語教育論。]
- 『日本語学の世界』(雑誌「日本語学」1996年7月臨時増刊号 明治書院)
- 『現代日本語必携』(「別冊国文学」No.53 2000 学燈社)
- [上記2冊は雑誌の臨時増刊号と別冊だが、日本語学が扱う諸領域の他、談話分析・社会言語学等の方法論にも触れている。『日本語学の世界』には日本語教育に関する記述もある。]

○講座…各領域についての基本的知識と研究動向を知るために

- 『講座 日本語と日本語教育 1巻～16巻』 1989 明治書院
- [トピックが比較的細かく設定されており、それぞれの分野について調べるのに便利。]
- 『講座 日本語学 1巻～12巻』 1982 明治書院
- [日本語の歴史的研究の方法、対照言語学の方法に重点がある。]
- 『朝倉日本語講座 1巻～10巻』 2002-2005 朝倉書店
- [日本語学の諸領域にわたって最近の傾向を知るのによい。]
- 『現代日本語講座 1巻～6巻』 2001-2002 明治書院
- [「ITの基底をなす言語情報」という視点で、現代日本語を6つの分野に絞って論じたもの。]
- 『シリーズ 日本語探求法 1巻～10巻』 2001-2005 朝倉書店
- [基礎から卒業論文作成までを目指した日本語研究の方法論を学べるシリーズ。具体的な事例研究を通して、文法・語彙・日本語史・方言・レトリックなど、分野ごとに方法論が提示されている。]

【その他】

日本語学が扱う領域は多岐にわたるため、ここでは一年次の「日本文法」に関連する領域のみ取り上げる。

○文法

- 『日本語の文法上・下』(日本語教育指導参考書4・5) 寺村秀夫 1981 国立国語研究所／大蔵省印刷局

〔上記2つは基本的事項を知るのに便利。「日本語文法」の授業テキストと併せて読むと理解しやすい。〕

『現代日本語文法 1～7』 日本語記述文法研究会編 2003～2010 くろしお出版 〔上級者向け。〕

『学校で教えてきている現代日本語の文法』 会田貞夫・中野博之・中村幸弘 2004 右文書院
 〔いわゆる学校文法の復習をしたい人に。解説が詳しくわかりやすい。〕

『国語教師が知っておきたい日本語文法』 山田敏弘 2004 くろしお出版
 〔いわゆる学校文法の不明確な点についてわかりやすく解説されている。〕

『品詞別 学校文法講座 1～8 別巻』 中山緑朗・飯田晴巳監修 2013～ 明治書院
 〔伝統的な文法研究に立脚した学校文法を新しい視点でとらえ直した、文法教育に役立つ講座。〕

『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 松岡弘監修 2000 スリーエーネットワーク

『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 白川博之監修 2001 スリーエーネットワーク
 〔上記2冊は、日本語教育用文法解説書。〕

『日本語文法がわかる事典』 林巨樹・池上秋彦・安藤千鶴子編 2004 東京堂出版
 〔文法用語についてわかりやすく解説したもので、事典形式ではあるが順に読んでいっても面白い。〕

『先生のための古典文法Q&A100』 中村幸弘 1993 右文書院
 〔古典文法に関する疑問を伝統的な立場から解説したもの。〕

『実例詳解 古典文法総覧』 小田勝 2015 和泉書院
 〔包括的に記述された、古典文法の種々相について常に参照できる文法書。同著者の『古代日本語文法』
 2007 おうふう、増補版の『古典文法詳説』2010 も参考になる。。〕

○語彙

『語彙の研究と教育』（日本語教育指導参考書 12・13）玉村文郎 1985 国立国語研究所／大蔵省印刷局
 〔語彙について一通りの知識を得るのに便利。〕

『図説 日本語』 林大監修 1982 角川書店
 〔日本語語彙を数量的に眺めたもので、データは古いが、見ているだけで面白くてためになる。〕

『講座日本語の語彙 1巻～11巻・別巻』 佐藤喜代治編 1982-83 明治書院
 〔いろいろな観点からの語彙の解説があり、別巻の語別文献目録も役に立つ。〕

○意味

『ことばの意味－辞書に書いてないこと 1～3』 柴田武 他 2002-2003 平凡社ライブラリー
 〔類義語の意味の具体的分析方法について知るのによい。〕

○日本語史

『日本語史』 沖森卓也編 1989 おうふう（『資料 日本語史』1991）

『日本語の歴史』 山口明德他 1997 東京大学出版会
 〔上記2つは、日本語の歴史について大きな流れをつかむための標準的な概説書。〕

『ケーススタディ 日本語の歴史』 半沢幹一他編 2002 おうふう
 〔いくつかのテーマを取り上げてトピック的に解説されている。〕

『新訂 日本語の歴史』 近藤泰弘他 2005 放送大学教育振興会
 〔もともと放送大学のテキストとして作られたもので、解説がわかりやすい。〕

『日本語の歴史』 全7巻＋別巻1 亀井孝他編 平凡社ライブラリー

2 上代文学基本文献

上代文学研究の扱う作品はおおむね奈良時代に成立したものであるが、その中には、文献としての作品が成立する以前に民間で伝承されたり、宮廷に保存されていた神話・伝説・歌謡などが含まれていて、研究対象は有史以来奈良朝までの文学ということになる。扱う文献が少ないこともあり、研究方法や作品に対する視点の置き方が、研究上の大きな比重を占め、それは個々の研究者によってまちまちである。だから、いわゆる入門書などで特定の研究者の意見を知る以前に、各自で作品そのものを読むことが望まれる。『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』の別に、読むためのテキスト・注釈書、調べるための索引、事典類を中心に紹介する。

古事記

【テキスト・注釈書】

○テキスト

日本古典文学大系『古事記・祝詞』 倉野憲司 1958 岩波書店

日本古典全書『古事記』上下 太田善麿・神田秀夫 1962 朝日新聞社

日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』 荻原浅男 小学館 1973 [現代語訳あり]

『古事記修訂版』 西宮一民 初版 1973、修訂版 2002 おうふう [本文校定に定評あり]

新潮日本古典集成『古事記』 西宮一民 1979 新潮社 [巻末に神名一覧を載せる]

日本思想大系『古事記』 青木・石母田・小林・佐伯 1982 岩波書店 [諸分野の研究者による注。

注釈書としての一貫した読みはないが、内容が多岐に互るのが特徴。]

新編日本古典文学全集『古事記』 神野志隆光・山口佳紀 1997 小学館

[独自の古事記論に基づく注が特徴]

『新校 古事記』(沖森卓也・佐藤信・矢島泉 2015 おうふう)

文庫に、岩波文庫(倉野憲司)・角川ソフィア文庫(中村啓信)・講談社学術文庫(3冊、次田真幸)

○注釈書

『古事記伝』 本居宣長 筑摩書房版「本居宣長全集」第9巻～第12巻

『古事記全註釈』7巻 倉野憲司 ～1980 三省堂

『古事記注釈』4巻 西郷信綱 ～1989 平凡社

『古事記注釈』8巻 西郷信綱 2006 ちくま学芸文庫 [上記注釈の文庫版]

【調べるために】

○索引

『古事記総索引』 正宗敦夫 1974 平凡社 [漢字・語彙]

『古事記音訓索引』 瀬間正之 1993 おうふう [語彙]

○研究史・事典類(上代文学全般の項(p.16)も参照のこと)

『古事記事典』 尾畑喜一郎編 おうふう 1988

[古事記の概説、神名・人名・氏族名・地名等の解説、研究文献一覧]

『日本神話事典』 青木周平他編 1997 大和書房

[記・紀・風土記等に掲載された日本神話に関する総合事典]

『日本神話必携』 稲岡耕二編 1982 学燈社 [記紀神話の梗概と分析、神名辞典など]

『古事記日本書紀必携』 神野志隆光編 1995 学燈社

〔記・紀の概説、神名・人名辞典、歴史事典、関連年表など〕

日本書紀

【テキスト・注釈書】

日本古典全書『日本書紀』6巻 武田祐吉 ～1957 朝日新聞社

日本古典文学大系『日本書紀』2巻 坂本・家永ほか ～1967 岩波書店

〔岩波文庫『日本書紀』5巻はこの縮刷版〕

新編日本古典文学全集『日本書紀』1～3 小島・直木・西宮・蔵中・毛利 ～1998 小学館

【調べるために】

○索引（事典類は古事記および上代文学全般の項を参照のこと）

『日本書紀総索引』全4巻 ～1968 角川書店 〔漢字〕

『日本書紀索引 六国史索引一』 1969 吉川弘文館 〔人名・件名・地名等〕

風土記

【テキスト・注釈書】

日本古典文学大系『風土記』 秋本吉郎 1958 岩波書店

日本古典全書『風土記』上下 久松潜一 ～1960 朝日新聞社

新編日本古典文学全集『風土記』 植垣節也 1997 小学館

講談社学術文庫『常陸国風土記』 秋本吉徳 1979 講談社 〔原文なし〕

講談社学術文庫『出雲国風土記』 萩原千鶴 1999 講談社

角川ソフィア文庫『風土記』上・下 中村啓信他 2015 角川書店

【調べるために】

○索引

『風土記の研究並びに漢字索引』 植垣節也 風間書房 1972 〔漢字〕

『古風土記ならびに風土記逸文語句索引』 橋本雅之 和泉書院 1999 〔神名・人名・地名等〕

○入門書

『風土記を学ぶ人のために』 植垣・橋本編 2001 世界思想社

『風土記を読む』 中村・飯泉・谷口 2006 おうふう 〔風土記中の神話伝承を抜粋して解説〕

『風土記探訪事典』 中村・飯泉・谷口 2006 東京堂 〔風土記中の記事を抜粋して解説〕

万葉集

【テキスト・注釈書】

○テキスト

日本古典文学大系『万葉集』一～四 高木市之助・五味智英・大野晋 ～1962 岩波書店

日本古典文学全集『万葉集』一～四 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 ～1975 小学館

新潮日本古典集成『万葉集』一～五 青木生子・井手至・伊藤博ほか ～1984 新潮社

新日本古典文学大系『万葉集』一～四 佐竹昭広・山田英雄 ～2003 岩波書店

新編日本古典文学全集『万葉集』一～四 小島憲之・木下正俊・東野治之 1994-1996 小学館

文庫に、講談社文庫（4冊、中西進）、角川文庫（2冊、伊藤博）、旺文社文庫（3冊、桜井満）

岩波文庫（5冊、佐竹昭広他）

○注釈書

『萬葉集評釋』12巻 窪田空穂 1943-1952 東京堂
『萬葉集全註釋』14巻 武田祐吉 1956-1957 角川書店
『萬葉集注釋』22巻 澤瀉（おもだか）久孝 1957-1977 中央公論社
『萬葉集全注』20巻 1983～刊行中 有斐閣
『萬葉集釋注』10巻 伊藤博 1995-1996 集英社
『萬葉集全歌講義』10巻 阿蘇瑞枝 2006～2015 笠間書院
『万葉集全解』7巻 多田一臣 2009～2010 筑摩書房

【調べるために】

○索引

『萬葉集総索引』 正宗敦夫 1974 平凡社
『万葉集表記別類句索引』 日吉盛幸 1992 笠間書院
『万葉集歌句漢字総索引』 日吉盛幸 1992 おうふう
新日本古典文学大系別巻『万葉集索引』 佐竹昭広ほか 2004 岩波書店

○研究史・事典類（上代文学全般の項も参照のこと）

『万葉集必携』 稲岡耕二編 1979 学燈社
〔民俗事典・歴史事典・万葉和歌史・万葉研究史・人名事典・作品年表〕
『万葉集必携Ⅱ』 稲岡耕二編 1981 学燈社
〔作品別研究史・柿本人麻呂事典・山上憶良事典・大伴家持事典〕
『万葉道しるべ』 大森亮尚ほか編 1982 和泉書院〔万葉集研究のための基礎資料・基礎知識〕
『万葉集事典』 稲岡耕二編 1983 学燈社
〔万葉びとの四季事典・万葉集名歌事典・歌ことば辞典・全作者事典・表現事典（枕詞・序詞・対句・
比喩）・比較文学事典・歴史事典・万葉集の巻々・諸本・注釈・万葉地図〕
『万葉集を読むための研究事典』 稲岡耕二編 1985 学燈社
〔主要作家・関連事項の概説および問題点の整理〕
『万葉事始』 坂本・毛利編 1995 和泉書院
〔万葉集研究のための基礎資料・基礎知識・作者別作品番号索引〕
『万葉ことば事典』 青木周平ほか編 2001 大和書房
『万葉集を読むための基礎百科』 神野志隆光編 2002 学燈社
〔五十首を読む・基礎知識・これからの万葉集〕
『古代和歌』 高松寿夫 2003 早大文学部
〔万葉各期の概説・関連文献の解題・基礎資料など。受講感覚で読むことができる。〕

上代文学全般

【調べるために】

○辞典 『時代別国語大辞典上代編』 三省堂

○研究史・事典類

『上代説話事典』 大久間・乾編 1993 雄山閣
〔紀記・風土記・万葉集などに見られる神話・説話の総合事典〕
『上代文学研究事典』 小野寛・桜井満 1996 おうふう
〔上代文学全般に関する研究史・研究課題、参考文献など〕

3 中古文学基本文献

中古文学とは、平安時代に作られた文学作品をいう。比較的平穏な約 400 年の間に、多彩な文学作品が創作された。その担い手は京の都の貴族たちであったが、中でも女性貴族たちの果たした役割は大きい。女性貴族たちは、仮名という表現手段を駆使し、繊細で優美な表現の世界を生み出したのである。文学史上、他に例を見ないほど、多くの文才あふれる女性たちが和歌、物語、日記などを残した。中でも『源氏物語』は日本の古典文学を代表する作品の一つとして、後世に多くの影響を残し、海外での評価も高い。以下、中古文学の読解に必要な基礎文献を紹介する。

【テキスト・注釈書】

『源氏物語』『枕草子』をはじめ主要な作品は、日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集（小学館）、朝日古典全書（朝日新聞社）、新潮日本古典集成（新潮社）などのシリーズに収められている。比較的新しいものとしては、新日本古典文学大系（岩波書店）、新編日本古典文学全集（小学館）、和歌に限ったものとしては、和歌文学大系（明治書院）などがある。これらをまず図書館で、確認してみよう。さらに関心がある作品の一文を注釈書どうしで比べてみると、本文の違いや解釈の違いなど自分なりの発見があるかもしれない。たとえば、『枕草子』は日本古典文学全集本の新旧で、底本が異なっていて、本文の違いは一目瞭然である（旧は能因本系の本文、新は三卷本系の本文を底本として校訂している）。両者を比べることで、写本の問題に興味広がることであろう。このような叢書以外にも、それぞれの作品につき、注釈書、テキストが刊行されている。いくつか列挙してみよう。

『源氏物語評釈』 玉上琢弥 1981 角川書店／『枕草子全注釈』 田中重太郎 1972 角川書店
『枕草子解環』 萩谷朴 1981 同朋社出版／『蜻蛉日記全注釈』 柿本奨 1966 角川書店
『蜻蛉日記解釈大成』 上村悦子 1983 明治書院／『紫式部日記全注釈』 萩谷朴 1971 角川書店
『全講和泉式部日記』 円地文子・鈴木一雄 1965 至文堂／『伊勢物語全評釈』 竹岡正夫 1988
右文書院／『古今和歌集全評釈』 竹岡正夫 1976 右文書院／『中世王朝物語全集』 笠間書院

これ以外にもたくさんある。図書館の検索システムを駆使して、調べてみたい。また文庫に入っている作品も多い。角川文庫のビギナーズクラシックス・シリーズは安価で入門書として最適なので購入することを薦めたい。以下に、このシリーズから、中古文学に属する作品を掲げる。

『枕草子』 角川書店編集部 2001 角川書店／『竹取物語』 角川書店編集部 2001 角川書店
『源氏物語』 角川書店編集部 2001 角川書店／『蜻蛉日記』 角川書店編集部 2002 角川書店
『今昔物語集』 角川書店編集部 2002 角川書店／『古今和歌集』 中島輝賢編 2007 角川書店
『更級日記』 川村裕子編 2007 角川書店／『うつほ物語』 室城秀之編 2007 角川書店
『土佐日記』 西山秀人編 2007 角川書店／『和泉式部日記』 川村裕子編 2007 角川書店
『伊勢物語』 坂口由美子編 2007 角川書店／『大鏡』 武田友宏編 2007 角川書店

【調べるために】

○源氏物語

『源氏物語事典』 池田亀鑑編 1987 東京堂出版 [専門的な内容]
『源氏物語事典』 秋山虔編 1989 学燈社 [情報量が多い]
『源氏物語事典』 林田孝和他編 2002 大和書房 [最近の研究成果を含む]
『源氏物語講座』 今井卓爾編 1991 勉誠出版／『講座 源氏物語の世界』 秋山虔編 1980 有斐閣

『講座源氏物語研究』2006 おうふう／『新時代への源氏学』2014 竹林舎
『源氏物語』研究ハンドブック1～3 吉海直人 1999 翰林書房
『源氏物語引歌索引』伊井春樹 1982 笠間書院
『源氏物語を学ぶ人のために』伊井春樹編 1983 世界思想社
『新講 源氏物語を学ぶ人のために』高橋亨・久保朝孝編 1995 世界思想社
『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』加藤睦・小嶋菜温子編 2007 世界思想社
『人物で読む源氏物語』上原作和編 2005 勉誠出版
『源氏の女君』清水好子 1974 塙書店／『源氏物語の女性たち』秋山虔 1988 小学館
『講座源氏物語研究』伊井春樹監修 2006 おうふう
『源氏物語大成』池田亀鑑 1953-1956 中央公論社
『源氏物語要覧』中野幸一 1995 武蔵野書院 [源氏読解の手引書]
『源氏物語みちしるべ』中野幸一 1997 小学館／『源氏物語への招待』今井源衛 1997 小学館
『源氏物語図典』秋山虔・小町谷照彦編 1997 小学館
『じっくり見たい「源氏物語絵巻」』佐野みどり 2000 小学館

○物語文学

『歌語り・歌物語事典』雨海博洋他編 1997 勉誠出版
『中世王朝物語・御伽草子事典』神田龍身・西沢正史編 2002 勉誠出版
『一冊の講座 伊勢物語』一冊の講座編集部 1988 有精堂
『別冊国文学 竹取物語伊勢物語必携』鈴木日出男編 1989 学燈社
『体系物語文学史』三谷栄一編 1982 有精堂
『王朝物語を学ぶ人のために』片桐洋一編 1992 世界思想社
『中世王朝物語を学ぶ人のために』大槻修・神野藤昭夫編 1997 世界思想社
『歴史物語講座』歴史物語講座刊行委員会 1997 風間書房
『研究講座伊勢物語の視界』王朝物語研究会 1995 新典社
『研究講座竹取物語の視界』王朝物語研究会 1998 新典社
『研究講座狭衣物語の視界』王朝物語研究会 1994 新典社
『研究講座堤中納言物語の視界』王朝物語研究会 1998 新典社

○枕草子・日記文学

『枕草子大事典』枕草子研究会 2001 勉誠出版
『日記文学事典』津本信博他編 2000 勉誠出版 [中世の日記文学も含む]
『枕草子講座』1975 有精堂
『女流日記文学講座』津本信博他編 1991 勉誠出版
『王朝女流日記を学ぶ人のために』久保朝孝編 1996 世界思想社
『別冊国文学 王朝女流日記必携』秋山虔編 1989 学燈社
『研究講座王朝女流日記の視界』王朝物語研究会 1999 新典社

○和歌 （「中世和歌を調べるために」も参照のこと）

『増補版 歌枕歌ことば辞典』 片桐洋一 1999 笠間書院・『歌ことば歌枕大辞典』 久保田淳他編 2001
『和歌文学大辞典』 書籍版・WEB版 古典ライブラリー WEB版は 日本文学Web図書館にあり
『和歌大辞典』 1986 犬養廉ほか編 明治書院
『新編国歌大観』 1983-1992 角川書店 必須のもの。CD-ROM・日本文学Web図書館にあり
『私家集大成』 1976 明治書院 / 『新編私家集大成』 2008 日本文学Web図書館にあり
『平安朝歌合大成 増補新訂版』 五冊 萩谷朴 1995 同朋舎出版
『別冊国文学 古典和歌必携』 久保田淳編 1990 学燈社
『平安文学研究ハンドブック』 田中登ほか編 2004 和泉書院 [平安文学全般を含む]

○歴史や背景など

『平安時代史事典』 古代学協会 1994 角川書店 / 『王朝語辞典』 秋山虔編 2000 東大出版会
『平安朝文学事典』 岡一男編 1972 東京堂出版 / 『有識故実大辞典』 鈴木敬三 1996 吉川弘文館
『有識故実図典』 鈴木敬三 1995 吉川弘文館
『別冊国文学 古典文学基礎知識必携』 小町谷照彦編 1991 学燈社
『国史大事典』 1～15 上・中・下 1979-1997 吉川弘文館 WEB版は JapanKnowledge にあり

【その他】

『はじめての源氏物語』 鈴木日出男 1991 講談社新書
『源氏物語』 秋山虔 1968 岩波新書
『源氏物語の世界』 日向一雅 2004 岩波新書
『紫式部』 清水好子 1973 岩波新書
『平安王朝』 保立道久 1996 岩波新書
『装束の日本史』 近藤好和 2007 平凡社新書
『平安朝の母と子』 服藤早苗 1991 中公新書
『平安朝の女と男』 服藤早苗 1995 中公新書

一度は行ってみたい！ 近くの図書館・博物館

国文学研究資料館……JR立川駅からバス、又は多摩都市モノレール高松駅下車。国文学関係の書籍・論文は原則として網羅的に集めて閲覧に供している。また全国の文庫などのマイクロフィルムや古典籍を所蔵しており、HPでも公開している。国文学の研究者にとって最も重要な研究資料館であり、活用が必須。随時展示も行っている。HPで、日本古典籍総合目録データベース、国文学論文目録データベースなど各種のDBを公開しており、これも活用が必須である。

永青文庫……JR目白駅前より都営バス新宿駅西口行きにて「椿山荘前」下車 徒歩3分。大学から近い。熊本の大名細川家伝来の歴史資料や美術品等の文化財を管理保存し、一般に公開。

江戸東京博物館……JR総武線 両国駅西口下車 徒歩3分、都営大江戸線 両国駅（江戸東京博物館前）A4 出口 徒歩1分。浮世絵や絵巻、着物、古地図、大型模型など、常設展示がある。

国立歴史民俗博物館……東京駅から総武本線佐倉駅(約60分)下車、バス約15分。(北口1番乗場から、ちばグリーンバス田町車庫行き乗車、「国立博物館入口」または「国立歴史民俗博物館」下車。日本の歴史・文化に関わるテーマ展示が充実。HPに歴史関係のデータベースがある。

4 中世文学基本文献

中世文学とは、基本的には鎌倉時代から安土桃山時代に生まれた文学を言う。中世は権力の交替が続き社会的には不安定であったが、総体的にはいわゆる庶民層の力が上昇していった時代であった。それを反映して、文学がより広範な人々に享受されるようになり、より多様な文学あるいは芸能が登場した時代である。もちろん和歌や物語など、前代の文学の伝統も継承される。以下、中世に特徴的な作品にかかわる基本文献を紹介する。

※中古文学の物語、日記、和歌の項（pp.18-19）も参照。

【テキスト・注釈書】

中世文学の代表的な作品は、以下のシリーズに収められているので、それらを見ることから始めたい。『平家物語』『太平記』といった軍記、『愚管抄』『増鏡』といった歴史に関する書、『方丈記』『徒然草』などの随筆、『新古今集』などの和歌、『十六夜日記』『とはずがたり』などの日記や紀行、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの説話、能や狂言、また、親鸞や日蓮などの教えを説いた法語なども収められている。

『日本古典全書』 朝日新聞社 / 『日本古典文学大系』 岩波書店 / 『日本古典文学全集』 小学館 / 『新潮日本古典集成』 新潮社 / 『新日本古典文学大系』 岩波書店 / 『新編日本古典文学全集』 小学館 WEB版は JapanKnowledge にあり / 『日本思想大系』 岩波書店

また、『日本古典評釈・全注釈叢書』（角川書店）の中に、『平家物語全注釈』上・中・下二、『方丈記全注釈』、『徒然草全注釈』上・下があり、『中世日記・紀行文学全評釈集成』1～7巻（勉誠出版）、『中世の文学』30冊（刊行中、三弥井書店）などがある（以下の項目参照）。

各作品個別のテキスト・注釈書もあるので、WINEで検索するとよい。また国文学研究資料館のHPに、日本古典籍総合目録データベースがあり、これは全国の図書館・文庫に所蔵される古典籍（原本）すべての基本台帳のようなデータベースであり、作品別に、現存する写本・版本を掲げている。

【調べるために】

○平家物語を調べるために

- 『平家物語大事典』 大津雄一他 2010 東京書籍〔平家物語に関するもっとも詳しい事典〕
- 『平家物語研究事典』 市古貞次他 1978 明治書院
- 『平家物語事典』 市古貞次 1973 明治書院〔平家物語に出てくる言葉についての辞典〕
- 『平家物語必携』 梶原正昭 1982 学燈社
- 『平家物語ハンドブック』 小林保治 2007 三省堂
- 『平家物語図典』 五味文彦・櫻井陽子 2005 小学館
- 『平家物語を知る事典』 日下力他 2005 東京堂出版〔以上3点は、物語の全体像を理解する時に便利〕

○説話・お伽草子を調べるために

- 『増補改訂説話文学総索引』 平林治徳他 1974 清文堂出版〔人名などのキーワードで、どのような説話がどの説話集に収められているかを調べる〕
- 『日本短編物語集事典』 小林保治他 1984 東京美術〔説話集の種類と特質を知る〕
- 『お伽草子事典』 徳田武夫編 2002 東京堂
- 『中世王朝物語・御伽草子事典』 神田龍身・西沢正史編 2002 勉誠出版
- 『日本昔話集成』 1部～3部 関敬吾 1950～58 角川書店

○中世和歌を調べるために → 中古文学の和歌 (pp.18-19) も参照のこと

『和歌文学大辞典』 書籍版・WEB版 古典ライブラリー WEB版は日本文学Web図書館にあり

『和歌大辞典』 1986 犬養廉ほか編 明治書院

『歌ことば歌枕大辞典』 久保田淳他編 2001 WEB版『和歌文学大辞典』の中にあり

『増補版 歌枕歌ことば辞典』 片桐洋一 1999 笠間書院

『和歌文学辞典』 有吉保編 1982 桜楓社

『連歌辞典』 廣木一人編 2010 東京堂出版

『歌枕辞典』 廣木一人編 2013 東京堂出版

※

『新編国歌大観』 角川書店 和歌研究に必須。書籍版・CD-ROM・日本文学Web図書館にあり

『私家集大成』 1976 明治書院 / 『新編私家集大成』 2008 WEB版は日本文学Web図書館にあり

『勅撰集作者索引』 1986 和泉書院 『私撰集作者索引』 正・続 1996 2004 和泉書院

『日本古典文学全集』の『歌論集』巻末所収「歌論用語」 [歌論用語の説明]

『平安朝歌合大成 増補新訂版』 五冊 萩谷朴 1995 同朋舎出版

『日本歌学大系』 全20冊 風間書房 [歌論書・歌学書・を集めたもの]

『和歌文学大系』 刊行中 明治書院 [勅撰集・主要な私家集などの注釈書]

『私家集注釈叢刊』 1～17 貴重本刊行会 [私家集の注釈書]

『私家集全釈叢書』 刊行中 風間書房 [私家集の注釈書]

『歌合・定数歌全釈叢書』 刊行中 風間書房 [歌合と、百首歌などの定数歌の注釈書]

『和歌文学注釈叢書』 刊行中 新典社 [私家集・歌合などの注釈書]

『新注和歌文学叢書』 刊行中 青簡舎 [私家集・私撰集などの注釈書]

『歌論歌学集成』 刊行中 三弥井書店 [主要な歌論書・歌学書の注釈書]

『和歌文学論集』 1～10 1993～1996 風間書房

『和歌文学講座』 1～10 1993 勉誠出版

○日記・紀行を調べるために

『日記文学事典』 2000 勉誠出版

『女流日記文学講座』 1～6 1991 勉誠出版

『中世日記紀行全評釈集成』 1～7 2004 勉誠出版

『中世日記紀行集』 新編日本古典文学全集 1994 小学館

『中世日記紀行集』 新日本古典文学大系 1990 岩波書店

○能・狂言を調べるために

『能楽ハンドブック』 小林保治他 2000 三省堂

『狂言ハンドブック』 油谷満夫 2000 三省堂

『能・狂言辞典』 西野春夫他 1999 平凡社

『能楽大事典』 小林貢他 2012 東京堂

○歴史や背景などを調べるために

『国史大事典』1～15 上・中・下 国史大事典編集委員会 1979-1997 吉川弘文館
 『日本歴史地名大系』 全5 1冊 平凡社
 『古事類苑』 全5 1冊
 [以上の三つはWEB版が JapanKnowledge にあり]
 『有職故実大辞典』 鈴木敬三 1996 吉川弘文館
 『日本仏教語辞典』 岩本裕 1998 平凡社
 『日本民俗大事典』上・下 福田アジオ他 1999-2000 吉川弘文館
 『日本伝奇伝説大事典』 乾克己他 1986 角川書店
 『日本史総覧』全8冊 新人物往来社 1983-1986
 『平安時代史事典』 古代学協会 1994 角川書店
 『平安京提要』 古代学協会 1994 角川書店

○人物（作者・登場人物など）を調べるために

『国書人名辞典』全5冊 1993 岩波書店 最も重要で基本的な辞典。
 『日本古典文学大辞典』1～6 日本古典文学大辞典編集委員会 1983-1985 岩波書店
 『日本古典文学大事典』 1998 明治書院
 『和歌文学大辞典』 『和歌大辞典』（前掲）
 『増補改訂説話文学総索引』 平林治徳他 1974 清文堂出版
 『朝日日本歴史人物事典』 朝日新聞社 1994
 『新訂増補国史大系』所収『尊卑分脈』（系図を調べる）
 同所収『公卿補任』、および『公家辞典』（公卿を調べる） いずれも吉川弘文館
 『大日本史料』明治から現在まで刊行が続いている史料集。東大史料編纂所編、東大出版会。
 歴史上の何年何月何日に何があったかを、歴史資料を網羅的に集めて掲げてあるもの。
 『大日本史料』・記録・日記類などのデータベース 東京大学史料編纂所HPで公開。大変便利で有益

【その他おすすめの本】

『古典講読シリーズ平家物語』 梶原正昭 1992 岩波書店
 『平家物語ー〈語り〉のテキスト』 兵藤裕己 1998 ちくま新書
 『『平家物語』の再誕ー創られた国民叙事詩』 大津雄一 2013 NHKブックス
 『戦場の精神史』 佐伯真一 2004 NHKブックス
 『太平記〈よみ〉の可能性』 兵藤裕己 2005 講談社学術文庫
 『説話の森 天狗・盗賊・異形の道化』 小峯和明 1991 大修館書店
 『中世説話の世界を読む』 小峯和明 1998 岩波書店
 『宇治拾遺物語の楽しみ方』 伊東玉美 2010 新典社
 『歌謡文学を学ぶ人のために』 小野恭靖 1999 世界思想社
 『梁塵秘抄の世界 中世を映す歌謡』 植木朝子 2009 角川選書
 『阿仏尼』田淵句美子 2009 吉川弘文館 人物叢書
 『中世尼僧 愛の果てにー『とはずがたり』の世界』 日下力 2012 角川選書
 『新古今集 後鳥羽院と定家の時代』田淵句美子 2011 角川選書
 『異端の皇女と女房歌人ー式子内親王たちの新古今集一』田淵句美子 2014 角川選書

5 近世文学基本文献

徳川幕府が成立した 1603 年から、明治維新の 1868 年までの約 300 年間の文学を対象とする。近世文学は、印刷技術の普及により出版活動が盛んになり、文学が大衆化した時代である。ために、さまざまな階層から作家が輩出し、さまざまな読者を想定した多様な作品が多量に生み出された。したがって近世文学を知るために必要となる文献は、問題に対してふさわしい文献をいかに探すか、注釈しようとするときどんな文献を見ればいいのか、などについて紹介する。

【テキスト】

近世文学の代表的な作品は、以下のシリーズに収められているので、それらを見ることから始めたい。まずは、江戸時代にはどんな作品があるのかと、ともかくも作品を読んでみることだ。

『日本古典全書』 朝日新聞社／『日本古典文学大系』 岩波書店

『日本古典文学全集』 小学館／『新潮日本古典集成』 新潮社

『新日本古典文学大系』 岩波書店／『新版日本古典文学全集』 小学館

『日本思想大系』 岩波書店

○ 江戸時代の作品を集めたシリーズに以下のものがある。

『叢書江戸文庫』 50 冊 国書刊行会

〔百物語怪談集や時事小説集・漂流奇談集成、あるいは出版社ごと・作家ごとなど、近世文学をさまざまなテーマで集めて納める一大叢書〕

『近世文学資料類従』 仮名草子編 39 冊・西鶴編 25 冊・古俳諧編 48 冊 勉誠社

〔原本の影印。近世文学がどんな形で出版されたかを見るのによい〕

『評釈江戸文学叢書』 11 冊 1970 講談社

〔戦前に出版された作品集ながら、解説や注釈、現代語訳が大いに参考になる。索引編も便利〕

○ ジャンル別の全集

『仮名草子集成』『八文字屋本全集』『噺本大系』『洒落本大成』『日本俳書大系』『古典俳文学大系』

『綿屋文庫俳書集成』など

○ 作家別の全集

『校本芭蕉全集』『蕪村全集』『一茶全集』『定本西鶴全集』『対訳西鶴全集』『上田秋成全集』

『近松全集』『鶴屋南北全集』『太田南畝全集』『馬琴中編読本集成』など

○ 近世文学は活字になっているものは一部であり、他は版本、写本などによって読むことになる。とはいえ、作品が翻刻されていればそれにしたがって調査するのも方法である。

『国文学複製翻刻書目総覧』正・続 貴重本刊行会

○ 江戸時代の作品で、活字本や影印本になっていないものも多い。それらを調べるために。

『補訂版 国書総目録』全八巻・別巻 1 1991 岩波書店

○ 作家については以下の本が、簡単な紹介と、著述の一覧を載せていて有益。

『国書人名事典』5 冊 1999 岩波書店

『日本近世人名辞典』2005 吉川弘文館〔各分野の有名人について詳しい。参考文献が有益〕

【調べるために】

◎研究史

『日本古典文学大辞典』6冊 1985 岩波書店 [参考図書、テキストなどの情報も入手できる]

『新版近世文学研究事典』岡本勝・雲英末雄編 2006 おうふう

[近世文学は作者も作品も数が多い。年譜や資料集などがまとめられている作家はほんの一部で、研究課題が山積している。近世文学に関して、今までどうことが論じられてきたのか、今どういう点が問題になっているのかを知るうえで、先ず手に取るべき一冊]

その他 『俳文学大辞典』1995 角川書店 / 『西鶴事典』1996 おうふう / 『秋成研究事典』2015 笠間書院 など

◎注釈するために

○ 辞典類 言葉・風俗を調べるために

『日本国語大辞典 第二版』小学館 [→WEB「JapanKnowledge」から利用可能]

『角川古語大辞典』角川書店 [特に江戸時代の語彙についての解説・考証が秀逸]

『近松語彙』上田万年・樋口慶千代共撰 富山房 [近松門左衛門の浄瑠璃からの用例]

『雑俳語辞典』正統 鈴木勝忠編 東京堂出版 [雑俳に用いられた語句を広汎に採録]

『川柳大辞典』粕谷宏紀編 東京堂出版 [川柳に用いられた語句を例句とともに採録]

『江戸語辞典』大久保忠国・木下和子編 1991 東京堂出版 [江戸時代に使用例のある語を採録]

『近世上方語辞典』前田勇編 1964 東京堂出版 [江戸時代の京阪で使用例のある語を採録]

○ 江戸時代の社会・風俗について調べるために

『古事類苑』51冊 吉川弘文館 [明治から大正にかけて編纂された日本最大規模の百科事典]

『群書索引』3巻・『広文庫』名著普及会

『徳川実紀』正・続12篇 索引・事項索引4冊 [19世紀前半に編纂された江戸幕府の公式記録]

『和漢三才図会』上下 寺島良庵 1970 東京美術

[近世中期(1712自序)に刊行された日本初の百科事典]

『嬉遊笑覧』喜多村信節著 名著刊行会 [1830自序の風俗関係の百科事典]

『色道大鏡』2006 八木書店 [藤本箕山著の遊里百科全書。江戸寛文期の京都島原遊郭を基に、遊郭内の名前の由来、しきたり、遊びの実際、心中・起請文などを詳述する。]

『江戸時代館』2002 小学館

『絵でよむ 江戸のくらし風俗大事典』2004 柏書房 [「黄表紙」「絵本」の挿絵3000点を収録]

『江戸文学俗信辞典』1989 東京堂出版

『西鶴と浮世草子研究』第一号付録 西鶴浮世草子全挿絵画像CD [画証としての活用に最適]

○ 季節、季語、年中行事、名所、連想語について調べるために

『図説俳句大歳時記』5巻 角川書店

[歳時記の決定版、考証欄には江戸時代の季語に関する情報が整理されていて貴重]

『大歳時記』4巻 集英社

[和歌を含めた季語の歴史を整理、和歌・連歌・俳諧の用例。第3巻には、歌枕・俳枕も詳述]

『江戸文学地名辞典』1973 東京堂出版 [近世文学の舞台となった江戸の地名について解説]

『俳諧類船集』『俳諧類船集索引 付合語編』『俳諧類船集索引 事項編』近世文芸叢刊1、別巻I II [1670年に刊行された文学用語を中心とした連想語辞典]

『連歌寄合書三種集成』2005 清文堂〔17世紀半ばの、雅語を中心とした連想語辞典〕

○ 出版社について知りたい人

『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』今田洋三 1977 NHKブックス

『書誌学談義 江戸の板本』中野三敏 1995 岩波書店

『近世書林板元総覧』井上隆明 1998 青裳堂書店

○ 索引で言葉の用例を調べ、そのテキストにあたって注を参考にするのも、大切な作業だ。

『校本芭蕉全集』11冊 1991 富士見書房〔第10巻に語彙索引〕

『対訳西鶴全集』18冊 2007 明治書院〔第18巻「総索引」に全編の語彙索引〕

【入門書】

『西鶴をよむ』長谷川強 2003 笠間書院

『西鶴のおもしろさ一名篇を読む』江本裕・谷脇理史 勉誠出版

『西鶴と元禄メディア』中嶋隆 1994 NHKブックス

『新編 西鶴と元禄メディア』中嶋隆 2011 笠間書院

『21世紀日本文学ガイド 井原西鶴』中嶋隆編 2012 ひつじ書房

『西鶴に学ぶ 貧者の教訓・富者の知恵』中嶋隆 2012 創元社

『芭蕉の世界』尾形仿 講談社学術文庫

『日本語のしゃれ』鈴木棠三 講談社学術文庫

『表現としての俳諧』堀切実 岩波現代文庫

『芭蕉の方法―連句というコミュニケーション』宮脇真彦 2002 角川選書

『21世紀日本文学ガイド 松尾芭蕉』佐藤勝明編 2011 ひつじ書房

『近松に親しむ』松平進 和泉書院

『近松への招待』鳥越文蔵・信多純一・内山美樹子・井口洋著 岩波セミナーブック 3 1

『忠臣蔵―もう一つの歴史感覚』渡辺保 中公文庫

『歌舞伎入門』古井戸秀夫 岩波ジュニア新書

『桜史』山田孝雄 講談社学術文庫

『江戸人とユートピア』日野龍夫 岩波現代文庫

『近世新崎人伝』中野三敏 岩波現代文庫

『江戸三〇〇年吉原のしきたり』渡辺憲司 青春出版社

『茶の湯 わび茶の心とかたち』熊倉功夫 教育社歴史新書

『日本古典書誌学総説』藤井隆 1991 和泉書院

『日本書誌学を学ぶ人のために』長友千代治・廣庭基介 1998 世界思想社

『千年生きる書物の世界 和本入門』橋口侯之介 2005 平凡社

6 近現代文学基本文献

近現代文学は主に明治期以降現代にいたる期間を対象とする。近代以降の出版物はきわめて多く、かつ書物だけではなく雑誌や新聞、映画等、対象の形式も多様なため、基本文献の幅も広い。研究書や解説書の量も膨大ではあるが、まず何よりも小説や評論の本文にふれることなくして研究ははじまらない。そこで、ここでは概説書や入門書よりも、近代文学の基本的な本文と、本文や記事を探したり、近代の表現や事象を調べる際に有用なツールに範囲をしばった。近代現代の表現を対象とした研究は文学書のみにとどまらず、広い範囲の記事や文献を探す作業をしばしば伴う。

【テキスト・注釈書】

『明治文学全集』 筑摩書房

〔収録している文章が多く、関連する書誌情報も豊富。明治期の作品、作家を読んでゆくときにはまず見てみると役に立つ。総索引の巻には語彙索引もついていて便利。〕

「国会図書館デジタルコレクション」

〔国会図書館が受け入れた資料のうち、著作権処理が完了したものをインターネット上で公開している。明治期から大正期の多くの図書の本文が無料で閲覧できる。→<https://www.dl.ndl.go.jp/>〕

『近代文学評論大系』 角川書店

〔著名な近代の評論を数多く収録、明治から昭和にかけての文学史上のいろいろな論争や出来事を調べたいときに。〕

『新日本古典文学大系』 明治編 岩波書店

『日本近代文学大系』 角川書店

〔近代文学作品はとにかく分からない言葉が多いが、細かい語彙の解説のついた全集を見たいときに使える全集。〕

- ・特定の作家の全集、あるいは地域やテーマによって編集された全集もあるので、自分の関心のある領域にそった全集、選集などがないかを調べてみることに。

【調べるために】

○近代の雑誌記事を探す

『大宅壮一文庫雑誌記事索引』〔1987年以前は冊子体、それ以降はインターネットで利用可〕

「20世紀メディア情報データベース」〔インターネット→<http://www.wul.waseda.ac.jp/imas/index.html>〕

MAGAZINEPLUS 〔インターネット→<http://www.wul.waseda.ac.jp/imas/index.html>〕

雑誌記事索引集成データベース 〔インターネット→<http://www.wul.waseda.ac.jp/imas/index.html>〕

Web版日本近代文学館 〔特に明治期 インターネット→<http://www.wul.waseda.ac.jp/imas/index.html>〕

○近代の新聞記事を探す

明治期の全国紙の記事検索も可能 〔インターネット→<http://www.wul.waseda.ac.jp/imas/index.html>〕

○翻訳文学を調べるとき

『明治・大正・昭和翻訳文学目録』 国立国会図書館編 1959 風間書房 〔明治以降翻訳された文献〕

○総目次……総合雑誌や文学雑誌の目次のデータのみを集めた「総目次」が数多く刊行されている。

索引がついている場合もあり、テーマや時期をかぎって調べるとき役立つ。

『中央公論 総目次』 1970 中央公論社。

『文章世界総目次・執筆者索引』 1986 日本近代文学館。

○文芸雑誌の目次情報

『現代日本文芸総覧』（増補改訂） 小田切進編 1992 明治文献資料刊行会

〔文学雑誌の目次情報を集成。特に雑誌単位で情報を調べたいとき便利。〕

『日本詩誌総覧』 現代詩誌総覧編集委員会 1996～ 日外アソシエーツ

○研究史・事典類

『日本近代文学大事典』 6冊 日本近代文学館編 1977～ 講談社

〔著者や雑誌、新聞や事項など、近代文学に関する広い範囲をカバー〕

『日本現代文学大事典』 2冊 三好行雄他編 1994 明治書院

『日本児童文学大事典』 3冊 大阪国際児童文学館編 1993 大日本図書

『演劇百科大事典』 6冊 早稲田大学演劇博物館編

『世界・日本映画作品辞典シリーズ』 25冊 日本映画史研究会編 1996～ 科学書院

○近代の文献、記事検索等についての補足情報

「国語国文学科で学ぶために 近代増補版」

〔インターネット→ <http://www.f.waseda.jp/a-wada/kokutame.html>〕

一度は行ってみたい！ 近くの美術館・博物館・図書館

五島美術館……交通=東急・大井町線「上野毛駅」下車徒歩5分。「渋谷駅」から東急・東横線「自由が丘駅」で大井町線に乗り換えて計約40分。源氏物語絵巻（絵4面詞9面）、紫式部日記絵巻（絵3面詞3面）、前九年合戦絵詞（断簡1幅）など国宝5件、重要文化財50件を含む約4000件の美術品を所蔵。

サントリー美術館……六本木東京ミッドタウン。都営地下鉄大江戸線六本木駅出口8・日比谷線六本木駅より直結。画、陶磁、漆工、ガラス、染織など、日本人の生活に密着した作品を主体として総数3,000件を収蔵。

出光美術館……JR「有楽町」駅 国際フォーラム口より徒歩5分。東京メトロ日比谷線・千代田線／都営三田線「日比谷」駅、東京メトロ有楽町線「有楽町」駅 帝劇方面出口より徒歩5分。収蔵品は国宝2件、重要文化財50件をふくむ1万件。国宝「伴大納言絵巻」をはじめとする日本の書画、中国・日本の陶磁器、近代作家の小杉放菴や板谷波山などのコレクション。

静嘉堂文庫……東急田園都市線「二子玉川」駅下車、シャトルバス5分。中国清末の陸心源の蔵書を受け継ぐ。「西行物語」「徒然草」「平中物語」など貴重な古典籍を収蔵。国文関係の主な蔵書はマイクロフィルムに収められて、大学でも閲覧可。美術館も、国宝・重文など5000点を収蔵する。

日本近代文学館……駒場公園内 京王井の頭線、駒場東大前駅（西口）徒歩7分。近代文学作家の原稿、手紙、蔵書など膨大な資料を収蔵。

神奈川県立金沢文庫……京浜急行「金沢文庫」駅下車徒歩15分。鎌倉時代、北条実時によって創建された。古刹称名（しょうみょう）寺の傍らにあり、貴重な漢籍、唐物の他、多くの中世仏教関連の資料や宝物を収蔵する。

史跡足利学校……東武伊勢崎線「足利市」駅下車徒歩15分。関東最古の学校で、室町時代に創建された。国宝や重要文化財指定の漢籍を所蔵する。

史跡湯島聖堂……JR中央線「お茶の水」駅下車徒歩5分。江戸の官学。「昌平坂学問所（昌平校）」。

孔子廟や孔子の立像がある。

7 中国文学（漢文学）基本文献

中国文学（漢文学）が対象とする領域は、『論語』『孟子』『老子』『莊子』をはじめとする思想哲学書から、『史記』『漢書』『三国志』……『十八史略』等の歴史書や、『文選』や唐詩、唐宋八家文、伝奇小説等の文学作品、さらには日本人の書いた漢詩文に至るまで、実に広範かつ多様なジャンルを包含している。空間的には、中国と日本、さらには朝鮮やベトナムまで含まれ、時間的にも、紀元前五世紀の孔子の時代から二十世紀まで優に二千年を超える時が対象となる。そのそれぞれについて、もっとも基礎的な文献を紹介するだけでも膨大な量に上るので、ここでは中国文学（漢文学）全般にかかわるもっとも基本的な資料を紹介することに止める。詳細については『漢文研究の手びき』（中国詩文研究会編、2007年改訂版、880円〔大学生協扱い〕）という、ジャンルや時代ごとのハンディーな文献リストがあるので、それを参照されたい。

【テキスト・注釈書】

中国文学（漢文学）の代表的な作品は、以下のシリーズに収められているので、それらを見ることから始めたい。ここでは、思想、歴史、文学すべての領域を収める叢書を下に紹介する。以下の叢書は、原文と書き下し文の他、語釈や現代語訳、作品解説が掲載されている。

『新釈漢文大系』 既刊 107 巻 （現在続刊中） 明治書院

〔<http://www.meijishoin.co.jp/search/index.php?mode=series&series=新釈漢文大系>に細目一覧あり〕

『全釈漢文大系』全 33 巻 1974-80 集英社

〔以上 2 種は、もっともオーソドックスな全文訳注書〕

『中国古典文学大系』全 60 巻 1967-75 平凡社〔書き下し文なし。白話小説を多く採り上げている〕

『研究資料漢文学』全 11 巻 1992-95 明治書院

〔教師指導書を補う目的で編まれたもの。教科書に採られた作品を網羅する〕

『中国古典選』全 38 巻 1978 朝日新聞社、朝日文庫

『中国の古典』全 33 巻 1981-86 学習研究社

〔原文を別冊にし、本編は書き下し文と語釈、現代語訳からなる〕

『鑑賞中国の古典』全 24 巻 1987-89 角川書店

〔収録作品は少なめだが、エッセイが複数掲載され、作品の背景となる知識や読み方を教えてくれる〕

『中国古典新書』正編 100 巻 続編 25 巻 （続刊中） 明德出版

『東洋文庫』 （続刊中） 平凡社

〔オーソドックスな全文訳注叢書には収められない書の翻訳や古典的な学術書が多い。大学のネット

ワークからこの電子版にアクセスできる。図書館→「学術情報検索」→「Japan Knowledge」→

「カルチャー」→「東洋文庫」〕

これらの叢書にどのような作品が収められているかについては、大学図書館のWINEで調べられる。その他、「中国古典叢書内容簡介」<http://www.rockfield.net/kanbun/congshu/>でも、一部紹介されているので、参照のこと。

中国や台湾のインターネット・ホームページには、中国古典関係の全文データが大量に公開されている。それらを利用できれば、語彙検索や原典調査に大変役立つであろう。なお、早稲田大学の図書館は、中国古典関係の図書所蔵数では日本有数の大学図書館である。ぜひ一度、地下一階や地下二階にある研究書庫の中国語図書コーナーに行って、原書を手に取り、開いていただきたい。『四庫全書』をはじめ中国や台湾で刊行されたたくさんの原書が収められている。

【調べるために】

○漢字や語彙を調べるために

『大漢和辞典』修訂版 全13巻 1984-2000 大修館書店

〔中国で『漢語大字典』全8巻(1986-90 四川辞書出版社ほか)と『漢語大詞典』全12巻(1986-94 漢語大詞典出版社)が出版されるまでは、世界最多の親字数・語彙数を誇った漢和辞典。『大漢和辞典語彙索引』(東洋学術研究所 1990 大修館書店)をあわせて利用すると便利。〕

『字通』 白川静 1996 平凡社

〔日本の漢字学の権威、白川氏による漢字字典の決定版。大学のネットワークから電子版にアクセスできる。図書館→「学術情報検索」→「Japan Knowledge」→「字通」〕

○中国古典全般の諸知識を調べるために

『中国学芸大事典』 近藤春雄 1978 大修館書店

〔中国古典関係で少し専門的な内容を調べる時に様々な情報を与えてくれる事典。情報は少し古いが、項目に関連する代表的な日本の論文名も掲載されている〕

『日本漢文学大事典』 近藤春雄 1978 明治書院

○中国の歴史を調べるために

『アジア歴史事典』全12巻 貝塚茂樹ほか 1984-85 平凡社

『東洋史事典』 京都大学東洋史事典編纂会 1980 東京創元社

○中国の思想を調べるために

『中国思想辞典』 日原利国ほか 1984 研文出版

【その他】

入手しやすい入門書を以下に掲げる。

『中国文学を学ぶ人のために』 興膳宏ほか 1991 世界思想社

『わかりやすくおもしろい中国文学講義』 九州大学中国文学会 2002 中国書店

『中国思想を学ぶ人のために―老荘思想と中国仏教―』 森三樹三郎ほか 1985 世界思想社

『中国哲学を学ぶ人のために』 本田清ほか 1975 世界思想社

『老荘思想を学ぶ人のために』 加地伸行 1997 世界思想社

この他、大修館書店の選書「あじあブックス」が、中国文化に関わる新しい研究成果を継続的に出版している。また、勉強出版の月刊誌「アジア遊学」が毎号、日本、中国、アジア関連の特集を組んでいる。

【中国・台湾のWebサイトにアクセスしてみる】

中国のWeb上のコンテンツはたいへん豊富で、もし中国語を駆使できれば、情報源として絶大な効力を発揮する。ぜひ一度トライしていただきたい。現在、大陸ではGBコードという文字コードを使用し、漢字フォントも「簡体字」で、日本のJISコード+「常用漢字」体とは異なる。また、台湾や香港では、Big5というコードで「繁体字」を用いている。ただし、MicrosoftのInternet Explorerにはコード自動変換機能がついているので、それを活用すれば問題なく表示できる。

たとえば、大陸には「国学網站」というサイトがあり、豊富なテキスト資料(簡体字版)が無料公開されている(URL: <http://www.guoxue.com/index.asp>)。

また台湾には「寒泉」というサイト(<http://210.69.170.100/s25/index.htm>)や中央研究院の「瀚典全文検索」(<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>)があり、これらはいずれも繁体字版のテキストデータである。

8 国語教育基本文献

国語教育の研究は決して座学にのみとどまるものではない。教育現場というフィールドに常に目を向けつつ、教育実践を視野に収めた研究を展開する必要がある。文献探索のみではなく、学習者や教育行政の現状を含めた教育現場の「いま、ここ」をしっかりと把握しつつ、様々な研究情報を取得して、広い視野から研究を進めることにしたい。国語教育研究に際しては、日本語・日本文学・中国文学に関する研究が必要なことは当然のことだが、その他教育学、教育心理学、社会学等関連分野に関する研究にも目配りが必要である。以下に紹介するのは、そのためのごく一部の情報にすぎない。

【テキスト・注釈書】

国語教育研究には、特に「テキスト・注釈書」に該当する文献があるわけではないが、次のような文献に様々な研究成果が収録されている。

『近代国語教育論大系』1～15 井上敏夫・他 1975～1976 光村図書

『文学教育基本論文集』1～4 西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男 1988 明治図書

『国語教育基本論文集成』1～30・別巻 飛田多喜雄・野地潤家監修 1993～1994 明治図書

また、国語教育研究者・実践家個人の著作集では、次のようなものがある。

『西尾実国語教育全集』1～10・別巻1・2 西尾実 1974～1978 教育出版

『時枝誠記国語教育論集』1・2 石井庄司編 1984 明治図書

『大村はま国語教室』1～15・別巻 大村はま 1982～1985 筑摩書房

『倉澤栄吉国語教育全集』1～12 倉澤栄吉 1987～1989 角川書店

【調べるために】

○辞典類（国語教育関係の用語を調べるために）

『国語教育辞典』 西尾実編 1957（2001復刻版） 朝倉書店

『国語科指導用語辞典』 田近洵一・井上尚美編 1984（2009第4版） 教育出版

『国語教育研究大辞典』 国語教育研究所編 1988（1991普及版） 明治図書

『高等学校国語教育情報辞典』 大平浩哉・鳴島甫編 1992 大修館書店

『国語教育辞典』 日本国語教育学会編 2001 朝倉書店

『国語科重要用語300の基礎知識』 大槻和夫編 2001 明治図書

『国語科重要用語辞典』 河野庸介編 2007 東京法令出版

『魅力ある言語活動の開発事典』 町田守弘編 2010 東京法令出版

『国語科重要用語事典』 高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春編 2015 明治図書

○入門書（基礎知識習得のために）

『新国語教育学研究』 全国大学国語教育学会編 1993 学芸図書

『国語教育を学ぶ人のために』 糸井通浩・植山俊宏編 1995 世界思想社

『中学校・高等学校国語科教育研究（新版）』 全国大学国語教育学会編 1998 学芸図書

『小学校国語科教育研究（新訂）』 全国大学国語教育学会編 2002 学芸図書

『国語教育学研究の成果と展望』 全国大学国語教育学会編 2002 明治図書

『国語科教育実践・研究必携』 全国大学国語教育学会編 2009 学芸図書

『実践国語科教育法―「楽しく、力のつく」授業の創造』 町田守弘編 2012 学文社
『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』 全国大学国語教育学会編 2013 学芸図書

○国語教育史関係（国語教育の歴史を学ぶために）

『国語教育史資料・第1巻～第6巻』 野地潤家他編 1981 東京法令出版
『国語教育方法論史』 飛田多喜雄 1965 明治図書
『続国語教育方法論史』 飛田多喜雄 1988 明治図書
『戦後文学教育方法論史』 浜本純逸 1978 明治図書
『戦後国語教育問題史』 田近洵一 1991（1999増補版） 大修館書店
『高等学校国語科の教科構造 戦後半世紀の展開』 幸田国広 2011 溪水社
『現代国語教育史研究』 田近洵一 2013 富山房インターナショナル

【事典類・目録】

『作品別文学教育実践史事典』 浜本純逸他編 1983 明治図書
『作品別文学教育実践史事典・第2集・小学校編』 浜本純逸他編 1988 明治図書
『作品別文学教育実践史事典・第2集・中学校・高等学校編』 浜本純逸他編 1987 明治図書
『国語教育文献総合目録・1958（昭和33）年～2007（平成19）年』 浜本純逸編 2008 溪水社
『国語教育総合事典』 日本国語教育学会編 2011 朝倉書店

【その他】

○参考にしてほしい資料

学習指導要領 各期の解説書、関連図書が出ている。
国語教科書 教育学部の学生読書室、教科書図書館等で閲覧できる。各教科書会社のホームページにアクセスすると、様々な情報を得ることができる。

○参考にしてほしいホームページ

文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>
国立教育政策研究所 <http://www.nier.go.jp/>
文化庁 <http://www.bunka.go.jp/>
国立国語研究所 <http://www.ninjal.ac.jp/>
東京都教育委員会 <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/> 必要に応じて他の道府県も。
早稲田大学国語教育学会 <http://www.waseda.jp/assoc-w-kokukyou/>
全国大学国語教育学会 <http://www.gakkai.ac/JTSJ/>
日本国語教育学会 <http://nikkoku.org/>
日本文学協会 <http://www3.ocn.ne.jp/~bungaku/index.html>
国語教育史学会 <http://www.kokugokyoiikushi.org/>

○訪問してほしい図書館・資料館

東書文庫 <http://www.tosho-bunko.jp/>
財団法人教科書研究センター附属図書館 <http://www.textbook-rc.or.jp/library/library.html>
〔教科書目録情報データベースも閲覧できる。〕

◆ 国語国文学科スタッフ

日 本 語 学	仁科 明	・ 松木 正恵
上 代 文 学	松本 直樹	
中 古 文 学	新美 哲彦	・ 福家 俊幸
中 世 文 学	大津 雄一	・ 田渕 句美子
近 世 文 学	中嶋 隆	・ 野村 亜住
近現代文学	石原 千秋	・ 金井 景子
	五味渕典嗣	・ 和田 敦彦
中 国 文 学	内山 精也	・ 堀 誠
国 語 教 育	幸田 国広	・ 町田 守弘

◆この本を手にするみなさんに

国語国文学科でこれから学んでゆくみなさんへの指針として、この本（「コクタメ」）を作成しました。

どんなジャンルに、どんな作品があり、どんなアプローチをしたらいいのか、これから各自で学んでいってもらいますが、まずはその入門として、必ず知っておくべきこと、知っていれば便利なことなどを記してあります。

演習やレポート、何よりも自習の手引きとして、常にこの本を座右において活用してください。

国語国文学科で学ぶために

2020年4月1日 13版 発行

編 者 「国語国文学科で学ぶために」編集委員会

発行者 早稲田大学教育学部国語国文学科

〒169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1